

現代文訳

むさしあぶみ

明暦の大火記録物語

原本

中村五兵衛板本

現代文訳注

高橋 駿雄

むさしあぶみ解説

現代では災害の最たるものは地震及びそれに伴う津波などで大火と云う言葉は聞かない。火事がなくなつた訳ではないが、耐火住宅や消防の発達などにより大火になる事はないと思われる。近世江戸時代に大都市江戸では「火事と喧嘩は江戸の華」と云われるが、大きな火災が頻繁に起こっている。天正十八(1590)年徳川家康の関東入国時から、江戸は政治、商業、文化の中心となり急速に発展し人口も増加した。十八世紀には百万人(町人五十万、武家五十万)と云われ、世界最大の都市となつた。しかし基本は木造建築であり、町が密集した事により火事の危険は常にあり、大火の記録も多い。

その中でも明暦三年(1657)年正月十八、十九両日の大火は空前絶後のものだったようである。この時はそれ以前三ヶ月程雨が一滴も降らず家々は乾燥しきつており、又強い北風が吹き、夕方から急に西風に替る等種々の悪条件が重なつた事により大火とな

り、死者十万余人と伝える。

又この明暦の大火は全く関連のない三つの火元、十八日午後二時に本郷、十九日午前十時に小石川、十九日午後四時に麴町より夫々出火し、両日共に強い北風と夕方から突然の西風により江戸の中心地を隈なく焼き、多くの人々が避難先で火に追い詰められている。江戸の町は現在以上に堀や川が縦横に防禦と運送の為に造られていたが、炎はいとも簡単にこれらの障壁を越えたようである。

江戸城は現在も残る大きな堀で囲まれていたが、当時存在した天守閣が導火線の様になったか、十九日の火が城内に入り本丸（現東御苑）も類焼している。西の丸（現皇居）は残ったが、その西側（現吹上御苑）にあった御三家の屋敷も類焼した。

「むさしあぶみ」は上記明暦の大火の記録物語であり、大火の四年後、万治四（1661）年京都の中村五兵衛出版である。作者名の記載がないが、浅井了意と云う浪人文筆家に

よると云われている。

物語の構成は大火の際、不覚を取り家族、家、財産全て失い世捨人となり、樂齋房と名乗る男が京都彷徨中に昔の知合いの小間物屋と偶然出会う。小間物屋の需に応じて大火の様子、幕府の復興支援、及び都市再建等を委しく語る。又自分がとった不覚も話して聞かせると云う筋書きになっている。

最後にとってつけた様に、大火前にあつた好ましくない風潮（奴による柴垣踊）が大火で一掃されたのは良い事だと云っているが、その頃傍若無人を極め、社会の鼻つまみ的な存在だった旗本奴の事ではないかと思われる。

又樂齋房の前身についての記述ないが、小身の真面目な旗本侍だったのではと思われる。馬を持つ程ではないが、しかるべき屋敷に住み刀も持っていたようである。

二〇二二年 六月 訳者記す

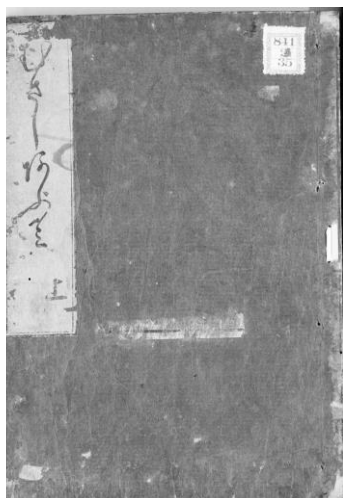
参照文献

むさしあぶみ 中村五兵衛版

落穂集追加巻九 酉年の大火

正保年中江戸絵図

東京時代マップ 大江戸編



国立国会図書館デジタルアーカイブ

国立公文書館内閣文庫

国立公文書館

新創社



目次

解説

むさしあぶみ 上

北野天神

本郷より出火

霊岩寺焼失

伝馬町・横山町へ延焼

火事場泥棒の話

囚人の一時放免

浅草門の悲劇

翌朝の悲喜劇

頁

三

八

八

一一

一二

一六

一九

二一

二四

三一

むさしあぶみ 下

小石川より再び出火

京橋の悲劇

麴町付近から新たに
出火

焼失地域全般と鎮魂

復興と支援

楽齋房の懺悔

過去の大きな災害

柴垣

むさしあぶみ上

むさしあぶみ下

三五

三五

四六

四四

四八

四五

六二

六六

六九

七二

九二

翻刻

翻刻

むさしあぶみ 上

北野天神

世すて人ではないが、世に捨てられて今は何もする事もなく髪を剃り、衣を墨に染めて楽齋房と名付けて心の俣、足に任せて京の都に上り彼方此方拝んで廻る。有名な北野の御社にも参拝して、こちらは吾故郷の湯島天神と御神体は同じであるとの事なので伏して拝む。

その時偶然に以前江戸で商いをしていた出入りの小間物売りに出会う。この男はたいへん驚き、どうしてこんな姿になられたかと聞く。そこで楽齋房が云うには、実はたいへん面目ない事をしてしまい、身の置き所がなく斯かる姿になったという。

それは一体どんな恥をかかれたのかと男が問えば楽齋房は、実は話すのもたいへん辛いことだが、以前明暦三(1657)年丁酉の正月の火災の事は聞いて居られるかと云う。男は、

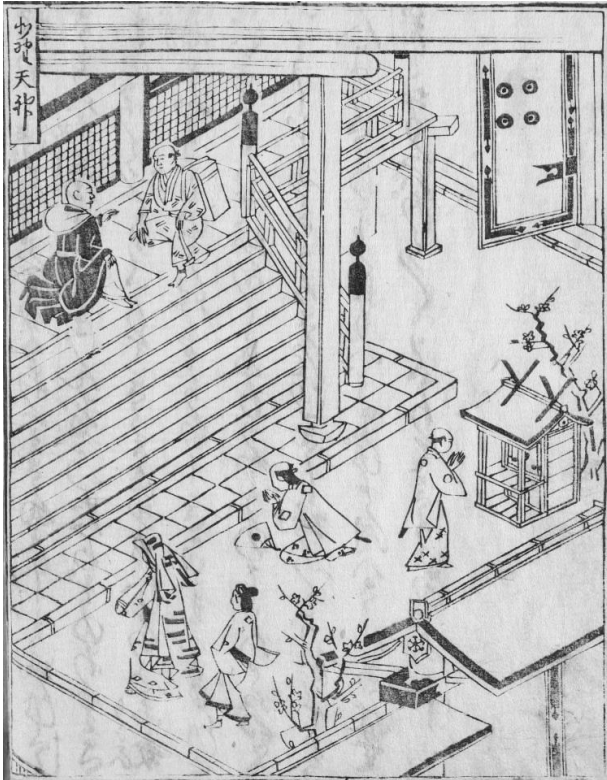
それは都でもよく知られている事で其時に江戸に出張していた商人や店の若い者が遭遇して犠牲になり、今でも歎き悲しむ親子の事をしばしば聞き伝えている事が多々あります。

それではお坊さん、慙愧、懺悔の為その時の様子を是非お聞かせ下さいと云う。樂齋房は、憂鬱な又悲しい記憶が自分の身に一度に迫ってきます。

この様な事は問わないのも辛く、又問うのも煩わしい。とりわけ人には話すまい、と思っていたが、ひとつ懺悔の為と思ひあらましをお話しましょう。

注 武蔵鑑（むさしあぶみ）さすがにかけて頼むには

とはぬもつらし とふもうるさし （伊勢物語）



京都北野天神

本郷より出火

時は明暦三（1657）年酉の正月十八日朝の八時頃、北西方向から風が吹き次第に大風となつて塵埃を空中に吹上げた。それが空にたなびく様子は雲か、煙の渦巻くか、それとも春の霞かと区別もできない中で、江戸中の貴人庶民皆門戸を開く事ができなかった。夜は明けた筈なのにまだ暗闇の状態で人の往来も全くなかった。

漸く午後二時頃になつた頃、本郷四丁目西口にある本妙寺と云う日蓮宗の寺から急に火が燃え出し、黒煙が天に上がり寺全体が燃え上がった。その時風が縦横、斜め上下と吹き廻り直ちに湯島方面に焼け出した。

火は旅籠屋町からかなり離れた堀（現神田川）を飛び越えて、駿河台の永井信濃守、戸田采女正、内藤飛驒守、松平下総守、津軽殿其外数ヶ所、及び佐竹よしのぶ邸を初め鷹匠町の大名小路数百の屋敷が忽ち灰燼となった。

それ以後町屋、鎌倉河岸（現内神田二丁目）へ焼け通り、夕方六時頃になると風は西に廻り激しく吹き、神田橋に火が移らずに遙か六七百メートル隔てた一石橋の近所鞆町（現日本橋本石町一丁目）へ飛び移った。

牧野佐渡守、鳥井主膳正、小浜民部少輔、其外町奉行の同心屋敷、八町堀の御舟蔵、御舟奉行所の建物数ヶ所、海辺に位置する松平越前守の大きく整備された建物群は風に乗った煙に包まれて焼け上り、猛火は勢いよく雲の上迄も登るのではないかと思われた。

靈岩寺焼失

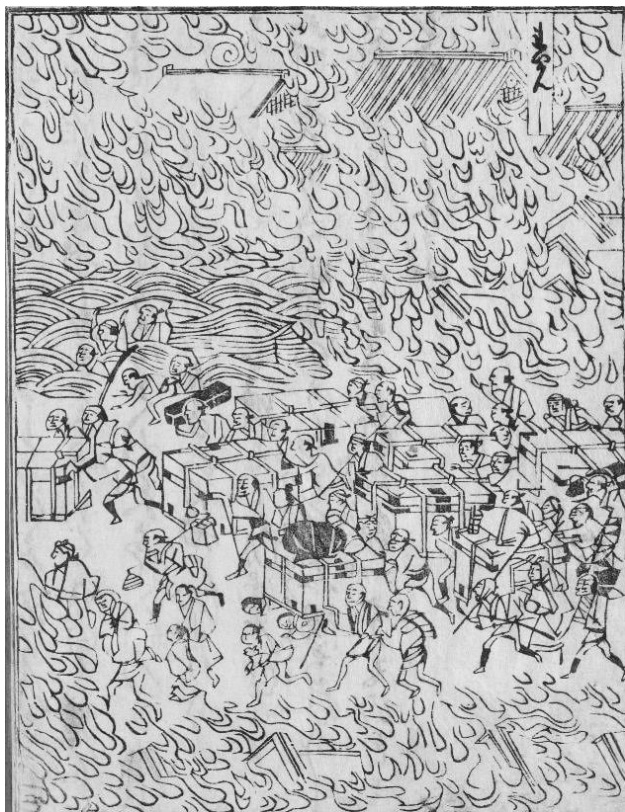
そこで数万の男女が煙から逃れようと風下を指して避難したが、向うは行止まりで靈岩寺へ駆け込んだ。墓地の周囲が大変広いので格好の場所として多くの人が此処に集まった。ところが当寺の本堂に火が懸り、更に数ヶ所の寺内建物が一斉に燃え上がった。一
黒煙は天を焦がして車輪程の大きさの炎が飛び散り、それが風で細かく分離されて、ま

るで雨の様に群がった大勢の人々の上に降りかかった。頭髮に火が付き、或いは袂の内側から燃え出し実に耐え難いものだった。人々は皆慌てふためき、火から逃れようと我先にと靈岸島の海辺を目指して走り泥の中に駆け込んだ。

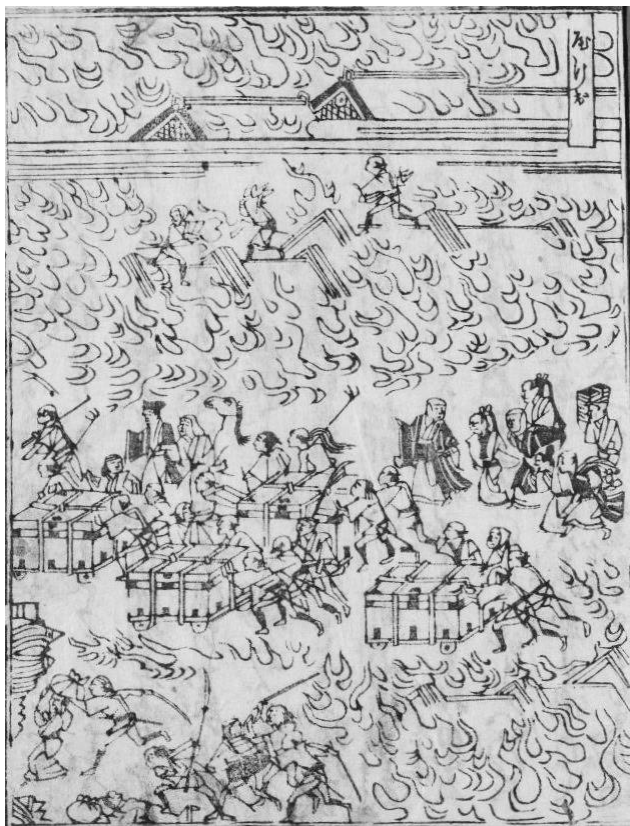
寒い中で食べる物も食べず水に浸って立ちすくみ、火からは逃れたが精力尽きて多くの人が凍死した。又その場所迄も逃げ切れなかった人々は炎に五体を焼かれ殆ど焦がれ死んだ。呻き叫ぶ声は凄まじく、実に世の無常を感じさせるものだった。

水と火の二つの災難で死んだ人は九千六百余人である。火は靈岸島の海辺迄塵も残さず焼き尽くし、更に五百メートル西の佃島内の石川大隅守の屋敷及び周囲の民家も一軒残らず全て焼失した。

注1 靈岸島は現在中央区新川一―二丁目、此処にあった靈岩寺は明暦の大火後、深川に移転。跡地は町屋になった。



炎上する靈岩寺



避難する貴賤老若男女

伝馬町・横山町へ延焼

その日の暮れがたになると西風は益々激しく吹き海上は波が高い。更に昨年十一月より雨が降らず空気は乾ききっていた。そこにこの風であるから風に乗って飛び散る炎は一キロ二キロ隔てた所でも燃え移り焼けあがった。

神田明神の社頭や仏閣は勿論の事、堀丹波守、太田備中守、村松町、材木町に至る迄多くの家屋敷は悉く焼き尽くし、柳原（現神田須田町三丁目）より和泉殿橋（現岩本町三丁目付近）を経て焼けた。この駿河台の火は直ちに須田町方面に燃え出し、一筋は真直に町屋に沿って焼けて行く。今一筋は誓願寺を廻り込み押しして来るので江戸中の町屋の老若の人々は、これはどうした事かと驚き叫びながら、我も我もと家財雑具を持ち出し西本願寺の門前に下して休んでいた。

ところが凄まじい旋風が起こり、当寺の本堂始め数ヶ所の寺内建物が同時にどっと燃え上がり、山の様に積み上げた道具に火が付いた。集まっていた人々は慌てふためき命だ

けは助かろうと井戸や溝の中に駆け込んだ。そこで下になった人は水に溺れ、中程の人は人に潰され、上の人は火に焼かれ、此処で死んだ人は四百五十人余だった。

又はじめ通り町を焼いた火は伝馬町に焼け延びてきた。数万の貴賤は此様子を見て、避難に便利と云う事で車長持を持ち出し浅草門（現浅草橋）を目指して退避するもの幾万と数え切れない。人の泣く声、車軸の音、建物が焼け崩れる音が一緒になり、まるで無数の落雷が同時にあつたかの様に思われた。

混乱の中で親は子を失い、子は親にはぐれて押し合いもみ合う中で人に踏み殺され、或いは車に轢かれて疵を負う者、半死半生で呻き叫ぶ者は数え切れない。

注1 本願寺は火災当時日本橋横山町にあったが、大火後は築地の現在位置に移転した。

注2 誓願寺は明暦大火当時神田須田町にあったが、大火後浅草（西浅草二）に移転した。



車長持で避難（上段）

燃え上がる本願寺（下段）

火事場泥棒の話

こんな火急の中でも盗人は居るものである。放置された車長持を盗んで方々へ逃げて行き、中には滑稽な咄もある。

ある位牌屋が自分の一族はこれぞとばかりに作った大位牌、小位牌、朱塗、金銀箔の彩色物各種を車長持に詰めて引き出した。しかし火が間近に迫り、逃げるためこの車長持を街角に放置した。何時の間にかこれを盗人が取り浅草の野辺で錠を捻じ切り開いた所、何の役にも立たぬ位牌が出てきた。

この火事を幸いと盗人は糠俵を米俵と思い、或いは藁草履の入った箱を小袖かと思ひ盗つて逃げる者もいた。

そんな中にこの所重病で寝たきりの人が居たが火事に驚き家族はどうして良いか分からず、病人を半長持に押し込み担ぎ出した。辻に下して置いたところ、何者かがこれを盗み取り、行方不明になってしまった。



避難する人々（上段）と盗人の戦利品（下段）

火事の中で家財一切焼き捨てた人もあり、或いは我が子を見失い、他人の子を我が子と
思つて手を引き、脊に負ひ遠く逃げた者もある。年老いた親、幼子、足の弱い妻を肩に掛
け、手を引き、泣く泣く避難するものもある。

囚人の一時放免

この時に伝馬町の牢屋奉行は石出帯刀だった。迫り来る猛火が牢屋に近付と帯刀は囚
人達に向い、お前達はこのままでは焼き殺される事は間違ひなく実に不憫の事である。こ
の俣焼き殺されるのは無惨であるから暫らくは放免する。足に任せて何処へでも逃げのび
よ。運よく命も助かり火も鎮まつたなら一人残らず下谷の蓮慶寺に戻る事。約束を守れば
我が身に代えてもお前達の命は助けよう。若し此約束を破り戻らなかつたら徹底的に探し
出す。そして本人は勿論一族皆誅伐すると言ひ、牢の門を開き数百人の囚人を放免した。

囚人達は手を合わせて涙を流し、有難いお恵みですと云い思い思いに逃げて行った。やがて火が鎮まると囚人達は約束通り皆下谷に集まって来たので帯刀は大へん喜び、お前達は誠に義理堅い、仮令重罪であれ義を守る者をどうして殺す事が出来ようかと、老中方へ報告して罪が許された。

これは道義のある世の証拠であり、政治が正しく行われ、多くの罪人達も義を守り命を助けられたのは有難い事である。此事を聞いた人々が云った事は、帯刀に情けあり、罪人に義があり、そして老中方に仁があり命をお助けになった。これは政治が行届いている証拠と人々は感じた。

しかしこの囚人達の中の一人は大変罪の重い者がいたが、是幸いと遠く逃げて自分の故郷に戻った。その人々は、此者は助かる筈のない罪人なのに逃げて帰って来たのは怪しいと江戸へ連行した。奉行方はたいへんこれを憎み死刑にした。



伝馬町牢屋 囚人の仮釈放

浅草門の悲劇

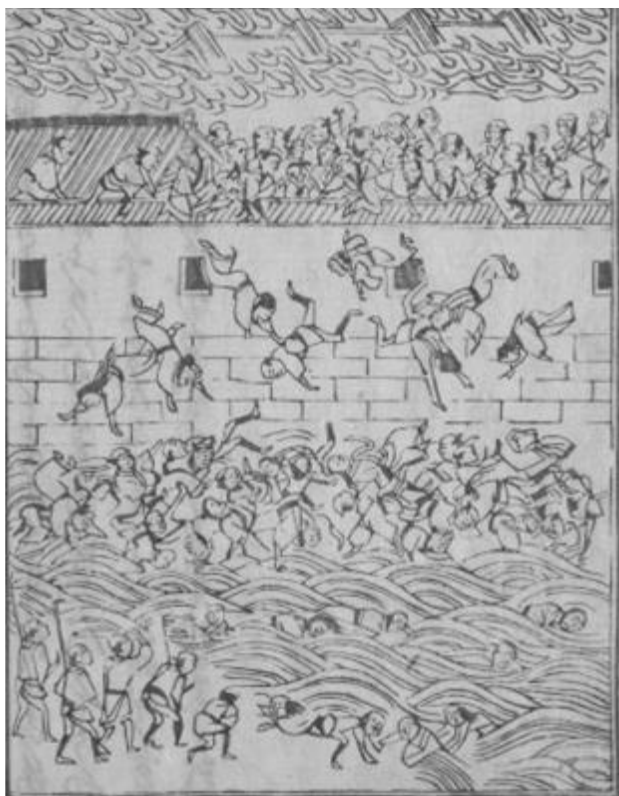
ところで火に追われ浅草門（現浅草橋付近）を目指して逃げる人々は武家、町民幾万と数え切れない。門の向こうは河原であり、門を通り枳形を出さえすれば混雑はない筈である。ところが何の間違いか、牢屋の囚人達が牢を破って逃げるぞ、逃すな捕えよと云う指示がでて浅草の枳形の門を閉めてしまった。

この事は思いも依らない事で、避難する人々は誰もその事は知らず後から後からと門を目指して車を牽いて押しかけた。伝馬町より浅草門迄の道筋一キロ程に人と車長持がびっしりと詰り錐を立てる程の空地もない状態である。後からは数万の人が押し来る。門の際に居る人々は何とかかんぬきを外そうとするが、家財道具をこれでもかと積み重ねているので、これが邪魔して扉を開ける事が出来ない。前へ進もうと思っても門は開けず、後に下がるには大勢の人が押し来る。進退ここに窮まり手に汗握り身を揉み茫然としていた。

そんな時、北の方で焼け止まっていた柳原辺の火が再び燃え出し、誓願寺前の大名小路に火が移り、立花左近、松浦肥前、細川帯刀、丹羽式部少輔、安藤但馬、加藤出羽守、同遠江守、山名禅閣、一色宮内少輔等都合三十五ヶ所、寺では日輪寺、勘善寺を始め、知足院、金剛院に至る迄百二十ヶ寺が一同に炎上した。この火が伝馬町の火とひとつになつて燃え上つた。炎は空に満ちて風に乗つて飛び散り浅草門を目指し押合い揉み合う人々の上に火の粉が降りかかる。

集まつた数万の男女は騒然となり、炎に堪え兼ね、或いは人の肩を踏んで走るもの、屋根の上に乗つて逃げる者あり、更に高さ十丈程の切り立つた石垣の上から堀に飛び込む。これで命は助かる思つた人々も途中の石垣で頭を打碎いたり、腕を折つたり半死半生になるものもある。下迄落ちて腰を痛めて立ち上がる事も出来ない。

そこへ次々と人々が飛び込むので、人で重なり、踏み殺され、押し殺され深い浅草の堀が死人で埋まり、其数二万三千余人、三百メートルに渉り平地になる程であつた。



門が開かず塀を乗り越える人々



閉じた浅草橋門の混乱

後から飛び込んだ者は前の人の死骸の上に飛ぶので、疵を負わずに河向こうへ上がり助かった者も多い。とかくする間に重厚に作られた監視矢倉に猛火が燃え掛り、崩れ落ちて死人の上に落ちかかる。逃げ遅れた人々は前に進もうと思っても既に火が廻り、後からは火の粉が雨の様に降りかかる。人々が夫々に念仏を唱えている内に前後を猛火に取りまかれ、悲鳴は天迄届き、地の底迄も聞こえる程で身の毛もよだつようである。翌日に見れば馬喰町、横山町の東西南北に重なる死人の様子は眼もあてられない。

その夜は十時頃になっても悪風は尚鎮まらず、火は海手を指して焼け延び、そこに位置する諸家の下屋敷以上十九ヶ所がひとつも残らず炎上した。此時御蔵の後の方に逃げ遅れた人々が七百三十余人あったが、御蔵に火が懸り、貯蔵の米俵が燃えたので、人々はこの煙にむせび、倒れて転げまわり或いは川中に転げ込んで死んだ。



浅草門の櫓炎上

更に炎は七八百メートルも隔てた大河（隅田川）を飛越え、牛島新田に至った。そこにあった家々を全て焼き払い午前四時頃に鎮火した。

注1 柳原は万世橋の南側付近。西風に乗って神田川添いに浅草橋方面に焼け延びた。

注2 浅草門は神田川に掛る浅草橋の手前（現浅草橋駅付近）にあった。

注3 牛島新田は現在の両国付近を言い、両国橋が明暦の大火後に造られ、江戸の拡張で都市化、現在の江東区、墨田区となる。

翌朝の悲喜劇

夜が明けると各方面に散りぢりに逃げ延びた人々は、親は子を探し、夫は妻を見失い涕ながら声を張り上げて何処其処の誰々と名を呼ぶ。漸く探し当て互いに喜ぶ人が居る一方、死に失せて巡り合う事なく力を落して歎く人もある。

当てもないまま、彼方此方に焼けて重なり合う死骸を片付けながら、親子兄弟夫婦の屍を尋ね求めた。或いは頭髮が全て焼失してまるで尼法師の様になったもの、黒く焼け焦がれたもの、或いは小袖他着ているものが全て焼失し、五体が焼けて肉が縦横に裂け、炙った魚の様になっているものもある。顔がすっかり変わってしまい、あれこれ見間違ひも多くあった。

この混乱に紛れて盗人共が死人の腰や肌につけた金銀を外し取り、焼けた金銀を売り捌いた。これを又買取ろうとする者も集つて来て市の様である。この他町中の辻や小路に落ち或いは捨てた家財道具等も数多くあったが、これを拾つて売りに出し俄に金儲けをした

ものも多い。

樂齋房が語るには、自身の母も行方知れずになったと云う。もう生きてはいないと思ひ、夜が明けると死人の重なっている場所を方々探し回ったところ母に似た人が焼け死んでいた。これだとばかりに葬礼、仏事を行わねばと戸板に載せて家に戻った。

家では孫、子、兄弟が枕辺に集い歎いていた時、門から本物の母が帰って来た。人々は、これは如何した事か、早くも亡霊になって来られたか。日頃念仏を唱えて居られたのは何のためか、妄念を醒まして早く極樂の最上席へ行こうと思われた筈なのに、未だ此娑婆に執心を残して亡霊になって来られたか、残念な事です早く帰りなさい。跡は懇ろに弔いますから。特に六道の辻では天上への道に迷わない様にして下さい、と云った。

母はたいへん驚いて、私は芝口迄逃げ延び命が助かった。死なずに帰って来たのに、それを喜ばずに何と云う事を言われるかと云う。人々は、いやご死骸が此処に在りますか

ら死んでいないと言われても納得できません、と云って持ち帰った屍をよくよく見れば母とは違う屍である。人違いは世によくある事だが全く不快な中にも可笑しい事である。

まず何事もなく帰って来られたのは嬉しい事だと急いで例の屍をこっそりと担ぎだして捨てたのは云う迄もない。それでは一家は何事もなく皆助かったのだから祝おうと酒肴を買求めて宴を催し喜び合った。

注1 芝口 現在の新橋駅付近

注2 六道の辻 仏教用語、生前の業因により六つの世界へ道が分かれる六叉路

むさしあぶみ上巻 終



樂齋房の母生還

上段：無事生還を祝う

下段：人違いの死骸を担出す

むさしあふみ 下

小石川より再び出火

明けて十九日は江戸中で無事を喜ぶ者、災難に歎く者が交じり合い、たいへん騒々しかった。焼け残った貴賤はその一族で類火に遭った人々に対し、日頃の付き合いはこの時こそ見捨てないとばかりに焼跡に駆けつけ、ああたこうだと世話をやき、或いは粥を煮て持って来るもの、或いは酒肴を届けるなどしていた。

そんな時、午前十時頃小石川伝通院表門下にある大番組の与力の宿所より火が出た。

此の煙の様子を遠くから見た人々は、しばらくの間は旋風が巻上げる土煙だろうと云う者、又昨日の焼跡の消え残りの煙だろうと云う者などで火事とは思わなかった。

しかし北風が昨夜より更に更に激しく吹いていたので、直に吉祥寺の学寮や宿坊に燃え移り、

車輪程の炎が黒煙と共に飛び散り十町二十町に燃え広がる事、同時に二十四ヶ所である。間もなく水戸中納言殿の広大な屋敷（現後楽園）に造り並べた大きな館が炎と煙を巻き上げて燃えた。

大堀（現神田川）を隔てた本鷹匠町の森の下、飯田町（飯田橋付近）、典寿院の御所、左右典厩公の南御殿（現北の丸公園）、本丸横の天守、二の丸、三の丸（現皇居東御苑内）を初めとして、松平加賀守、同伊豆守。土炊遠江守、水野出羽守、本多内記、酒井摂津守、藤堂大学頭、小笠原右近大夫、安藤対馬守、土屋民部少輔、井上河内守、酒井雅楽正、松平和泉守、同五郎、同越前守（現大手町付近）が炎上する。

以上の館は金銀珠玉をちりばめて磨いた大きな館である。これら大名屋敷十五ヶ所、其外南町奉行の建物、中川半左、伊奈半左衛門、天野五郎大夫、御細工小屋等五ヶ所、常盤橋の内側（現大手町）合わせて廿ヶ所が炎上した。

それに続いて鍛冶橋の内側（現丸の内）に移り、大身では細川越中守、松平新太郎、同相模守、酒井讚岐守、山内土佐守、有馬中務、京極丹後守、戸田左門、蜂須賀阿波守、森内記、京極主膳正、小笠原主膳正、吉良若狭守、保科弾正、松平丹後守、溝口出雲守、新庄越前守、松平但馬守、織田因幡守、松平遠江守、同出雲守、小出伊勢守、織田丹後守、水杉原帶刀、松平能登守、伊丹藏人、久世三四郎、酒部三十郎、同長門守、毛利壱三郎、水野下総守、山名主殿、米津内蔵介、前田右近、出野甚内、中根吉兵衛、近藤石見守、同縫殿介、日根野織部、神尾宮内、伝奏屋形、医師道三に至る迄大名の屋形廿六ヶ所、小名の屋形十七ヶ所、伊達遠江守、奥平大膳正、真田河内守、大久保加賀守、井伊兵部、松平山城、青山大膳、九鬼大和守、堀美作、各々数奇屋橋の内（現数寄屋橋跡の西側有楽町付近）九ヶ所で、南北（現大手町、丸の内、有楽町）都合七十二ヶ所が焼けた。

年月を掛けて造って来た立派で美しい豪壮な館、十五町に跨る数百軒が同時に燃え

上がり、黒煙は天を焦がし炎は空を焼、棟木や瓦の崩れ落ちる音は凄まじいと云う以外ない。天地は此の為に傾き、山河は此の為に覆るか人々は肝を潰し茫然自失となり、この世が全て猛火に包まれて災難が一時に起こり、国土が全て炎で焼け失せる思いをした。

注1 典寿院(天寿院)二代秀忠將軍の娘千姫で豊臣秀頼の正室。豊臣家滅亡後、江戸城北の丸に住む。この時六十才

注2 左右両典厩 三代將軍の家光の子供で、四代將軍家綱の二人の弟。此の頃の官位が左馬頭(綱重十三才)、右馬頭(綱吉十一才)と称されていたので典厩と云う。
後に綱吉が五代將軍となり、綱重の子家宣が六代將軍となる。

注3 江戸城の天守は高さ四十五m、天守台(現存十四m)で合わせて五十九m。
明暦の大火で炎上後、再建はされなかった。



大名の屋敷炎上と避難の様子

京橋の悲劇

午後四時頃から北風が西風になったので、炎のため紅葉山や西の丸が残るかどうか危ぶまれた。馬場の近辺の土手から堀を飛越え八重洲河岸（現丸の内馬場先門跡付近）へ火は移り、南北廿余町（現丸の内、有楽町）が全焼して町屋（現京橋・銀座方面）へ延焼する。

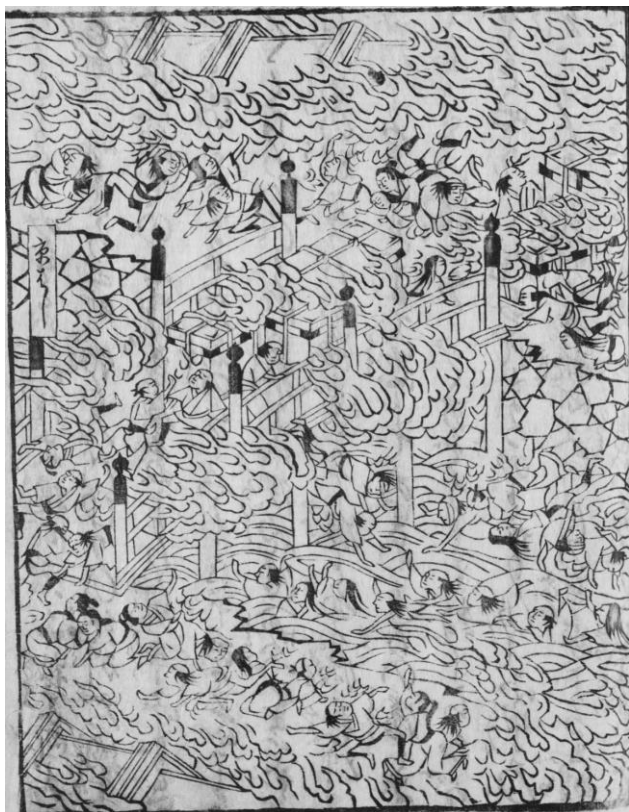
此の為中橋・京橋（銀座一丁目付近）の町人達は、昨日の火事が落ち着かない内に、又今日の大火事は何とした事か、これはでは世界が無くなってしまふのではないかと大慌てで昨日の焼跡へ逃げようと中橋を北へ向かう者、又風下を目指して京橋を南へ避難する人で家も町もごった返した。

鍛冶町と長崎町（京橋、銀座）の人々が前後ひとつになつて逃げだしたので益々込み合う。去年十一月頃から今日迄八十日余り一滴の雨も降らないので乾ききつた家の上に火の

粉が落ちかかり、その上激しい風に吹かれて車輪の様な猛火が地上にほとぼしった。町中に牽き出した車長持であるが、牽き手が火から逃げて放置したので、これらの長持が辻小路に積み上げられて通路が狭くなり、人が自由に通れない。

人々はおもひ合い混みあってひしめく間に猛火は先々へ燃え渡り、人々の眼前で京橋より中橋に至る迄の四本の橋が一度にどっと焼け落ちた。

ここで火の中に取り巻かれた人々は一塊になり南を指すか、北に帰るか、東西を右往左往して声を上げてわめき叫ぶ。既に火が間近く燃えて来ると、人々は互いに人を楯として火を避けようとするが充満する煙にむせび倒れ伏す。或いは五体に火が燃え付、揉み合い、むせび倒れて火に焼かれる。その後に来る者は将棋倒しの様に倒れ転び、其上に炎が落ちて煙が渦巻く。



京橋の炎上

混乱の中で叫ぶ声は、これこそ地獄で罪人達が焦熱の炎で焦がされ、獄卒の呵責を受けて、阿鼻叫喚の声を上げて悲しみ叫ぶのも此の様なものかと哀れである。

ここで焼死した者凡そ二万六千余人で南北三町、東西二町半に重なり合つて臥せた累々たる死骸で全く空地はなかった。大量の家財雑具、太刀、刀、金銀米銭が辻小路に捨てられ、踏みつけられ。焼け失せ、あわれと云うのも言葉にならない。

そこより南は新橋木挽町（現銀座七丁目付近）、東は材木町、水谷町（現東銀座付近）へ焼渡り、更に二町程の河向（現築地）にある紀州大納言、尾張大納言の両御蔵屋敷より奥平美作守に至る迄大名の蔵屋敷（現築地付近）十六ヶ所が悉く灰燼となる。

最後は鉄砲洲（現湊町、佃大橋手前）へ吹つけて其日の夕方六時頃海辺で焼けどまる。浅草川深川よりこれまで凡そ六里程の隅田川に沿う湊々で舟が焼けたが幾百艘か数え切れない。

麴町付近から新たな出火

斯くして漸く焼け鎮まると思ったが、午後四時頃に江戸城の西側にある麴町五丁目辺から別の火が燃え出しており、松平出羽守、同越後守、同但馬守、其外数十ヶ所、たいへん綺麗で立派な山王権現勧請の地、天神の社にいたるまで、忽ち煙と消えた。

西風が益々強く、城内の東照権現御社、紅葉山（現皇居吹上御苑）に猛火が激しく吹き付け危なかったが、東照権現の守護があったか、俄に北風となり西の丸は無事だった事はめでたい。

一方火は南に向い大名小路を焼き通り、井伊掃部頭、上杉弾正少輔、毛利長門守、伊達陸奥守、島津薩摩守、黒田右衛門佐、鍋島信濃守、南部山城守、真田伊豆守、丹羽左京、相馬大膳、京極刑部少輔、松平伊賀守、同周防守、戸沢右京、水野美作守、水谷伊勢守、金森長門守、板倉周防守、土方河内守、相良左兵衛、浅野安芸守、同内匠、同因幡守、

仙谷越前守、亀井能登守、伊東大和守、松平左京大夫、同大和守、柳生主膳正、秋田淡路守、小出大和守、太田原備前守、大関土佐守、鍋島紀伊守等のしつかりした館廿六ヶ所（現永田町、霞ヶ関付近）、小名では兼松又四郎、高木肥前を始として都合廿余ヶ所、その外御成橋の門より内側は一ヶ所も残らず忽ち片時の煙となった。

又西の丸の下（現皇居前広場）に至って阿部豊後守、堀田上野守、水野監物、松平外記、北条出羽守、稲葉美濃守、大久保右京、酒井備後守、松平縫殿、同若狭の屋形が焼けた。其外一文字に桜田の町屋に焼移り、直に愛宕の下の大名小路へ焼け延びる。まず大名では有馬藏人、大村丹後守、秋月長門守、稲場能登守、脇坂淡路守、中川内膳、島津但馬守、一柳監物、木下伊勢守、山崎甲斐守、植村出羽守、桑山修理、青木甲斐守、分部左京、北条美濃守、松平隱岐守、大島茂兵衛、小出大隅守、織田源十郎、堀三右衛門、佐久間不干、内藤左京、能勢小十郎、伊達政宗の中屋敷、毛利長門守の下屋敷、同吉川美濃守の

宿所をはじめとして大名小名の屋形八十五ヶ所が焼くずれた。

桜田の火はすでに通り町に燃え出て、海辺にて保科肥後守の下屋敷、伊達陸奥守の蔵屋敷、脇坂淡路守の下屋敷（現東新橋一―二丁目）、又その外に芝の浜手（現浜松町二丁目付近）では松平相模守、亀井能登守下屋敷に至る迄都合十八ヶ所、増上寺の中では東照近縁の社頭、台徳院、同じく御台の御廟同じく本堂、経蔵、鐘樓、五重の塔婆、三門北の裏門等は焼けずに残った。しかし所化寮百十ヶ寺、表の東門、神明の本社、神樂堂、護摩堂、それ程有名でない小さな祠に至る迄が夜の午前二時頃迄に全て炎上した。

此の時分には風も穏やかになり火を消す事も容易になった筈だが、人々は只々驚き慌てて方々へ逃げ散り命を守る事に専念し消火する人も少なかった。そのため風は吹かなくとも火は燃え広がり、増上寺より南へ十一町先に芝口三丁目の海手（現汐留付近）で自然と消えた。



上段 江戸城内紅葉山（本丸と西の丸の間）

下段 海沿いに立地する諸大名の蔵屋敷

焼失地域全般と鎮魂

本郷より此処迄の範囲六十余町、四方十里がまさに広い焼野原になり、茫々として端が見えない。全体として町屋が五百余町、大名小路の屋形五百余軒、小名の家屋敷六百余ヶ所、その外一般の家々は数え切れない。

御城の天守、大手門の櫓をはじめとして、外郭、浅草の監視所、神田の枳形に至る迄櫓の数の焼失三十余ヶ所、又日本橋をはじめ江戸中の種々の橋六十ヶ所が焼失した。

その内浅草橋と一石橋は残り、又橋元の後藤源左衛門と云う者の家だけが江戸中で名残とばかりに残った。

土蔵の数九千余庫の中焼け残ったのは十分の一も無く、代々の重宝や家々の記録も此時に焼失したものの多々あるだろう。

次に堂社では神田明神、山王権現、天神の社、神明の本宮、誓願寺、知足院、日輪寺、西東両本願寺、本誓寺、典学院、吉祥寺、金剛院、弥勒院、大龍寺、船光寺、薬師寺、

珠見寺、願教寺、唯然寺、地藏院、靈岩寺、報恩寺、調善寺、長久寺、信經寺、常蓮寺、増上寺の所化寮、開善寺、海庵寺、常德寺、善徳寺、円応院、其外の寺院三百五十余が全て焼亡した。

正月十八日の昼より焼おこり十九日の曙まで、又十九日の朝十時頃より廿日の朝方八時頃迄、昼夜四日の大火事に激しい旋風が吹き猛火となり、十町廿町を隔てて飛越えて燃え上がった。そこで燃え上がると前後を問わず広がり、人々は逃げ惑い、炎に焼かれ、煙にむせぶ。

又大名小名が日頃大切に飼っている馬も無数にある。家々に火が懸れば仕方なく綱を切り放すので、火に驚いた馬が一斉に駆け出し群衆の中に駆け込み、人と馬が揉み合いとなる。これで踏み殺され、打倒され、煙にむせび方々の堀や溝に百人、二百人程宛の死者がいたる所にあった。

火事が鎮静してからの細かい記録には凡十万二千百余人と書かれている。身寄りの者が尋ね求めて寺に送る場合もあるが、大部分は身元不明である。多くは変わりてはた姿で身元が分かる様な印もない。

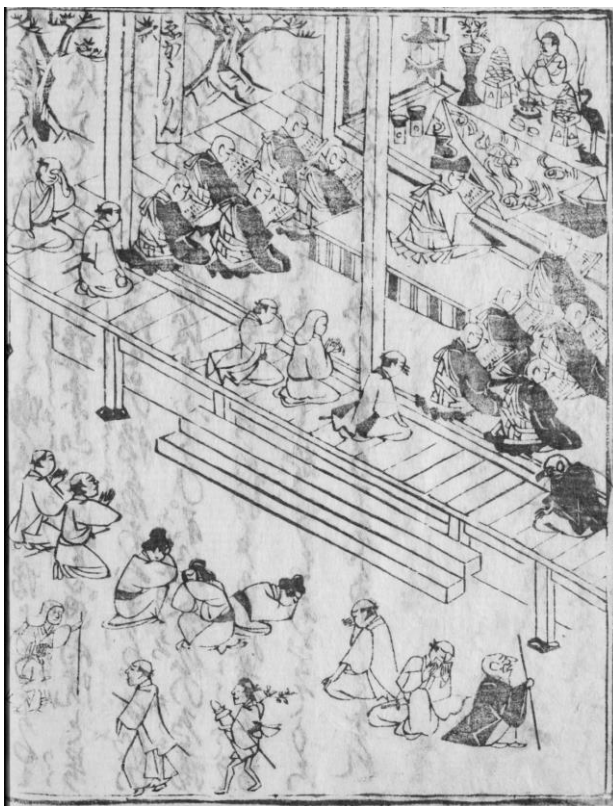
まもなくこの死骸を河原者に命じて武藏と下総の境となる牛島と云う所に船で運び六十四間四方の穴に埋めた。新しく塚を築き増上寺により寺を建て諸宗山無縁寺回向院と号した。諸寺の僧達が集まり一週間程かけて千部の経を読誦して霊を弔らい、以後念仏の道場として絶えず読経を行うようになったのも有難い事である。

江戸中の老若男女が列をなして参詣して、声を上げて皆々念仏を唱えて犠牲者の冥福を祈る事は尊い事である。

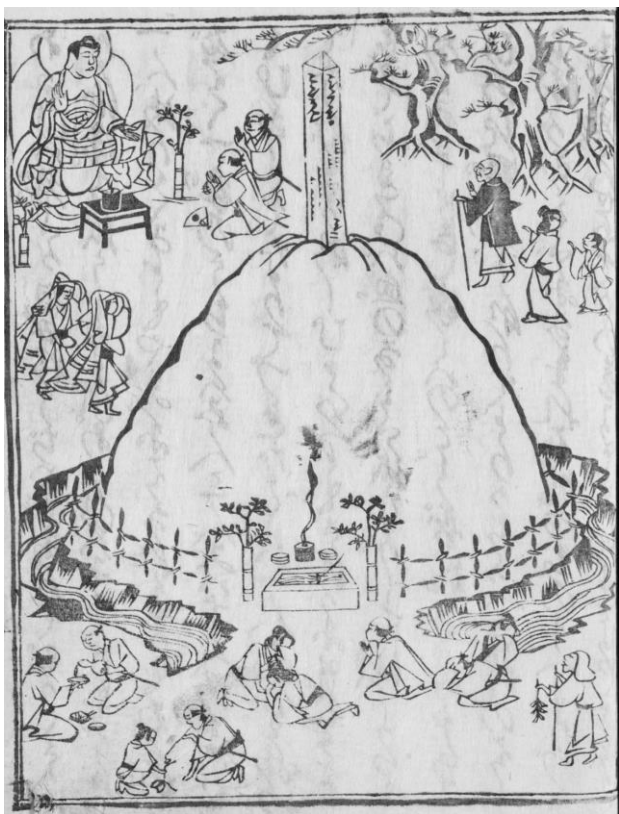
年老いた祖母、祖父だけ残り、若い子や孫を失ったもの、或いは妻が一人残り子供や夫を失ったもの、全て一家の中で五人、三人又は十人余りも犠牲になり、一人二人生残って

歎き悲しむが、さすがに自身を棄てる事もできないので、血の涙を流して泣く以外ない。家々は残らず焼けて江戸中が広い野原となっている。取り囲む竹の柱や菅菰もなく焼け土の上に蹲る。　昼はせめてもの音に紛れるが夜になると何とも言えない寂しさが襲い、悲しいとも辛いとも言葉にならない。

親を失い、夫を失い、子を失いあるいは妻を失った悲しさの余りに五輪卒塔婆を買求めて回向院の無縁塚の上に建てる人々がいる。ある人は一家十人を失い、卒塔婆十本を求めたが更に一本追加して下さいと云う。　売手は五輪卒塔婆と云う物は余分には立てないものだが、何のために一本を追加と云われるかと云えば、この人は、親類の内に火傷で苦しむものがあるので、もし死んだ時その者の分であると答えた。　昔、五輪を添よと云う咄があり、笑種となったのはこの様な事があつたからかと思われる。



回向院で念仏



回向院に造られた万人塚

多くの死者を一つの穴に埋めた訳で、自分の親族もそこに埋められたかも知れず、せめて悲しさのあまり思い思いに五輪卒塔婆を塚の上に立並べて死者の極楽往生を祈り供養の念仏を唱えるのを見聞するのも悲しい。

注 落穂集の作者、大道寺友山は明暦の大火時、十九才で桜田付近の大名屋敷（浅野分家）に勤務しており大火に遭遇する。自身の経験や周囲の見聞を落穂集（追加巻九）の中で述べている。その中で特に目を引くのは

- ・ 十九日の火が本丸に達しそうになり、家綱將軍や大奥が西の丸に避難する様子
- ・ 自身が主君と共に桜田の屋敷（炎上）から虎ノ門外に避難する様子
- ・ 幕閣（松平伊豆守、阿部豊後守、保科肥後守、井伊掃部頭）の復興対応など
- ・ 焼けた範圍等むさしあぶみと概ね一致するが、異なるのは西の丸下（現皇居前広場）は西の丸と共に焼残ったとしている。むさしあぶみでは西の丸下も類焼としている。

復興と支援

去年の十一月より当年正月迄日照りで晴天が続き地下迄も乾き切っていた。今月の廿日迄雨は一滴も降らなかったのに、廿一日に大雪が降る積もり激しい嵐で寒い事この上もなかった。こんな時に江戸中に米と云うもの一粒もなく、三日間は大飢饉だった。その上竹木も無いので仮小屋も作れず大方の人々は雪霜に打たれて寒さの為、肌が凍り多くの男女が死亡した。何の因果か多くの人が火を逃れても水に溺れ、餓え、凍えて何れも命を失った事は無惨としか言いようがない。

然る處に御城の西の方、山の手筋に僅かに焼け残った大名小名が思い思いに日本橋、京橋方々で仮屋を立て役人を付けて粥を煮て餓えた人々に振舞った。又御城中からは内藤帯刀、松浦肥前、岩木伊予等を奉行として御成橋、新橋、日本橋、筋かい橋、増上寺前に仮屋をたて、粥を煮て飢人窮民に施したので江戸中の老若男女が集まり支給を受けた。

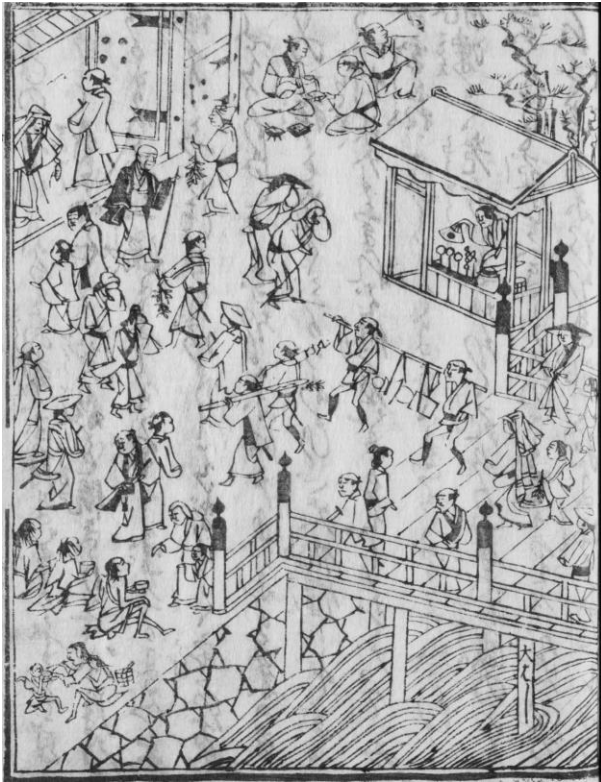


粥の施行

その粥を受けて食べる入れ物もなく焼けて割れた茶碗に受ける。それも間に合わず余りの寒さと餓えと悲しさに直接手で受ける者もある。これら人々の様子は頭髮が焼け、或いは顔に火傷を負った者もあり、小袖の前後裾迄焼けたものをもみ消し、漸く肩に掛けているもの、手足の火傷を負った者もある。妻子、孫に別れ泣く泣く集まる人もある。この前迄はかなり富貴栄華だった人も一族皆失い身一つとなり命だけ助かり、寒さに恥も忘れた若い人妻なども多く集り、小鉢のかけらに粥をうけて涙と共にすする者もある。実に哀れな様子である。

さて二月の中頃には城外の元の場所に夫々小屋を建てて商売を営む。江戸中の焼出された人々は、縁を頼りに貴賤共に集まってくるので、大変な賑わいである。

三月頃には何とか工夫して町屋は皆同じような柴の庵を結んで雨風を防いでいるが、大火以前の家を考えると哀れである。



しかし治世安民の良い政治が行われ、幕府より銀子壹万貫目（現代価値約百億円）が町人に下贈され、これで家を造り元通り商売をせよとあった。町奉行所の神尾備前、石谷将監兩人がこれを受けて江戸市中四百町、城外の辺町百余町の町人を呼んで銀子を渡した。

その歳の九月十月には建設工事も終えて町並は一樣に六万間が棟を並べ、軒を揃えて綺麗に建てられた。もとの道路は広さ六間だったが、往来するのに狭いと云う事で広さは十間となった。このため車馬は勿論人の往復も楽になった。

白金町から柳原まで町屋は一樣に立ち退かされて高さ二丈四尺（約七m）の土手が石で東西十町程築かれた。日本橋の南の万町より四日市（現日本橋一丁目付近）迄の町屋を取り除き、高さ四間程川端に沿って北向きに東西二町半程高く上げた。

又日本橋より京橋迄の八町の間で町家三ヶ所を取り除き、会所が三十間づつに広くなっ

た。これは町屋があまり込み合い人々が集まっているので、ややもすれば失火で人や物を損なう事が度々起こる。土手を築く事により、江戸中の人々が、災害があっても退避が容易となろうと云う事である。そこで前記取除かれた五ヶ所の町人達には立ち退き料として一家に付金子七十両（現代価値約四百万円余）が代替地に添えて支給された。

又その年の暮には、屋形の焼けた大名小名へ残らず金子が支給された。上は公侯より下は民間に至る迄広範な幕府將軍の恩沢により、江戸中が元の様に治まって繁昌して高家貴人は礼義厚く、庶民も贅沢に走らず目出度く栄え生活も日々向上した。



幕府からの町民への復興支援金

楽齋房の懺悔

楽齋房は語る。小間物売殿、如何か聞いて下され、思いがけない大恥をかいたと云うのは此時の事である。いっその事語って聞かせましょう。

私は十八日の火事では、親類家中無事だったので、目出度い事であり酒肴を買求め、十九日の朝に祝いをして数杯飲んだ酒に酔い、前後不覚となつてしまった。

しかし又火事が起こったので、妻子は私をどうやって避難させるか考え、車長持に押し込み錠を掛けて引き出したが、火に追われたか芝口（現新橋駅付近）に放置した。

盗人共が集まり鎖を捻じ切り長持を壊そうとする音が寝耳に入り目を覚ました。見回すと四方は板で、側に刀一式と小袖などがあるのが手に触った。私は思うに、自分は死んで棺に納められて野辺に送られた。そこで地獄の獄卒共が責め苦を負わせるために棺を壊そうとしているに違いない。此の刀で一先ずは防いで見ようと思った。刀を抜いて長持か

ら躍り出たところ、盗人達は肝を冷して逃げ去った。

そこで立ち上がって見れば、辺りは暗闇で遙か東は茫々と火が燃えて人の呻き叫ぶ声が聞こえる。思うにあそこは多分無間地獄に違いない。罪人達が地獄の猛火に焦がされ獄卒に責められている悲鳴だろう、恐ろしい事だ、何とかして極楽の道に行かねばと思って彷徨すると馬が沢山駆けてくる。さては此処は畜生道の辺かと思ひ、更に行くと思ひ焼け出された女や子供、老人達が人の肩に担がれ引き立てられて来る。これは亡くなった罪人を娑婆の世界から獄卒共が連れて来たものだろうと思ひながら暗い方へ行く。

芝口に出ると十王堂があり、微かに燈明をかがげて閻魔大王の外審判をする王達が並んでいる。私は娑婆に居た時に悪い事もせず、人の物を盗んだ事ありません。折々念仏も唱えていたので必ず罪科も軽いでしようから、極楽に送って下さいと云った。しかし木像

の閻魔大王であるから何の返答もなかった。どんな目に合うか分からないので恐ろしくて急いでその場を走り出た。

彼方此方徘徊していると、鐘の音、念仏の声が聞こえる。是こそ西方極樂の上席に違いないと思い、近くに寄り門を敲く。中より何方かと云うので、此の世を去った者です、明けて下さい、観音様、早く私を立派な蓮の台に上げて下さいと云った。

中より大きな笑いとどよめきがあり、火事にうろたえて気が狂った者が来たぞと云う。力なく其場を去ると夜もほのぼの明けて来た

この様な時、大名方の焼屋敷で粥を煮て施行されるのを見る。人々が集まって手を差出してこれを受けて食べる姿は何とも物哀しく浅ましい。これはきっと餓鬼道に違いないと思う。ふと傍らを見ると逃げる盗人を追いかけて一刀の下に切り倒すのを見て修羅道かと思ひ、念仏を唱えて休んでいた。

そこへ親しくしていた友人が来て、如何したのかと聞かれて夢が醒め、恥ずかしい事こ

の上もなかった。

一門、妻子、家も財産も全て失ったので、これを菩提の縁として、直に髪を剃り衣を墨で染めて此処迄さまよって来た次第である。私は生きながら六道を巡ったと思う。

今は普通に世を過ぐす憂鬱に比べれば、生き仏になったつもりで心の俣に行きたい所へ行き今少しの余生をたのしみたい。火事に遭い一族皆失ったのは悲しい事だが、菩提を弔うのはよい方法ではないだろうかと云う。

小間物売は重ねて、実にこんな一大事が起こるのは稀な事ですから、心が動揺して斯様な失敗もあるものです。それ程恥と思われる必要はありませんと云う。

注 六道 仏教では死後に前世の行いにより、地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、

人間道、天道に振り分けられるという。人間道、天道が善趣、外は悪趣と云う。

過去の大きな災害

ところで昔もこの様に大勢の人が死亡した事もあったでしょうかと小問物売が問うと
楽齋房は答えて云う。

昔の事を伝え聞くと、唐土（もろこし）で宋の仁宗皇帝の時代、嘉祐四年十二月（1030年頃）に大きな地震があり国民の家々を揺り倒した。この下敷きになり死者は二万二千三百人、疵を負い半死半生になったり一生の片輪になった者は国中に五千六百人と記している。

その後又元の世宗皇帝の時代、祥興廿七年八月（1280年頃）に又大地が大きく動いて山が崩れて谷を埋め、大木が倒れては川をせき止め、地は裂け割れて、下より泥を押し上げて黒煙は天に舞い上がった。国中で死者は七千余人と記す。

同じく宋の成宗皇帝の時代、大徳十年八月に大地震があり、五千余人死亡した。同じく武宗皇帝の時代、至令三年六月に洪水が襲い、官舎や民家二万一千八百廿九軒を押し流し、

溺死者は数え切れずと記している。

その他飢饉、洪水、兵火で人民が死亡した事は度々だが、此度の火災による死傷者の人数程ではない。

又日本では人皇第十代崇神天皇の時代、即位五年に国内で死亡した人は半分以上と云うが、これは疫病の流行に依るものである。

中世に平家が権力を握り恣に奢ったが、南都（奈良）の人民が平家を恨んで調伏すると聞き、治承四年（1180）十二月廿八日、本三位の中将平重衡が三万余騎で南都に押寄せ、般若坂の在家に火を掛けて攻めたので七大寺の僧兵は煙に咽び防禦できず散乱した。

北西の風が激しく吹いて黒煙は大仏殿に燃え付いた。此大仏殿の上に仮天井を構築して、此処に稚児や尼法師が多数上って隠れていた。その時猛火が既に堂に燃え付いたので、皆先を争い降りる途中梯子が折れた。下の者は押し殺され、上の者は高い天井から落ち重

なった。天井の奥に居る者は下りるに降りられない。普通の家なら下から抱き下ろすか、足を掴んで引き下す事もできるが、なにせ日本一の大伽藍であるから十丈（三十m）以上の梁の上の事であり今更助かる方法もない。

余りの悲しさに飛び降りるものは微塵に碎け死んだ。火が燃え近づくに従って泣き叫ぶ声は大地に響き、次第に煙に咽び倒れ伏す。頭髮、着衣に火が付き、其間に仏殿が燃え上がり、大仏と共に皆灰となったと云う。

その後鎌倉幕府の北条貞時が執権の時、永仁元年（1293）四月に突然大地が震え、家々を揺り倒した。或いは長押（なげし）に押しつぶされ、壁に押され、屋根板を押さえる石で頭を打ち砕かれて鎌倉中での死者は一人余、其外手足を失い耳や鼻を失い半死半生で長く苦しむ者は数え切れないと云う。

近年では正保二（1645）年には濃尾地方で洪水があり、両国（尾張、美濃）が一面に海の様になり、堤が崩れて家が流流され多くの人が死亡したと聞く。しかし此度の火事で数

万人が焼死した事は前代未聞である。

柴垣

何時頃の事だろうか、さざれ石の巖となりて、二葉の松の生そいて等と云う小唄が流行って唄っていた頃は上も下も目出度く面白かった。

しかし誰が伝えて始めたのか、この頃は北国の下働きの米搗歌とか言つて柴垣歌と云うものが流行つて、歴々の会合酒宴の座でも第一の見ものとなった。

卑俗で無骨な男（やつこ）が黒く汚い肌を脱ぎ、何とも言えない顔付で目をむき、口をゆがめて肩や胸を敲き、只管（ひたすら）に身をくねらすのは狂人の様である。右に左にねじかえり、仰向けやうつ伏せになり、あがくの座中から声を掛けて囃し手を打つて面白がっている。見るのも疎ましく不愉快だった。

ところが諸家共に皆柴垣となり、大部分はもう此町に住めない者もある。火に焼かれて逃げる場所もなく柴垣打ちながら死んだか。謳歌していた事を思いだすと眉をひそめ、鼻柱を縮めてつぶやく人もある。これも時節の巡り合わせで今更驚く事でもないが、中には困った人もあるだろう。

然しながら前にも述べた様に、幕府將軍の援助が大変手厚いので江戸中は再び榮え賑わい国も豊かになった。更に平和な世の印として、松に小松の生い添いて枝も榮える若緑、仰ぐに飽かぬ御世ぞ久しきと云う歌に戻った。

今は是迄で咄は終りとさせていたたく、と云い樂齋房は鳥居の方を南に向って行った。

万治四年（1661） 丑三月吉日

京都寺町二条下ル町

中村五兵衛開板（出版）

むさしあぶみ

翻刻

注 P00 は国会図書館本の原本写真頁数

むさしあぶみ 上

P2

世すて人にハあらで世にすてはくられ、今

はひたすらすべきわぎなく、かみをそり衣を

すみにそめつつ、樂齋房とかやなをつきて

心のゆくかたにしたがひ、足にまかせて都の

かたにのほり、爰かしこおがみめぐり、名におふ

北野の御やしろにぞまうでけり、身が古郷

ゆしまの天神とハ御一躰の御事なりと

ふしおがみ、かなたこなたと見まハすところに

年ごろあづまの方へ行かよふこま者うりに

あひたり、此男大きにきもをつぶし、扱いかなれ

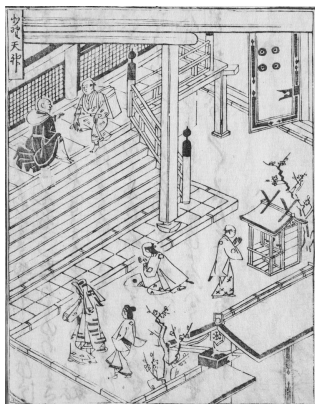
ばかかすかたにはなり給ふといふ、樂齋房云
やう、さればおもひの外なるめんぼくをうしなひ
て、身のをきどころなきまゝに、かゝる姿にハ成
侍りといふ、それはいかなる恥をかき給ふらんおぼ
つかなしととひければ、さればこそかたるに付て
なおなおつらきことの侍り、さだめてそのかみ
明暦三年ひのとのとり正月の火災の事ハきゝ
および給ふらんといふ、男いふやう、それハかくれ
なきことにて其時の災難に都方にも手代
わかきものくだりあハせてむなしくなりたる
事ありて、今になげきかなしむ親子とも是

おほく聞つたへたるありさま、さしもおびただし
さらば御坊ざんぎさんげのため、そのありさま
まをあらあらかたりてきかさせ給へといふ、樂齋
房申すやう、ものうき事かなしき事わが身ひと
つにせまりておぼえたり、かやうのことハとハぬも
つらく、とふもうるさきむさしあぶみ、かけても
人にかたらじとハおもへども、ひとつハさんげのた
めとおもへばあらあらかたりてきかすべし

P4

(絵)

扱も明暦三年丁酉正月十八日辰刻ばかりのこ
となるに、乾のかたより風吹出ししきりに大



京都北野天神

風となり、ちりほこりを中天に吹上て空に

たまひきわたる有さま、雲かあらぬか煙のう

ずまくか、春のかすみのたな引かとあやしむ

ほどに、江戸中の貴賤門戸をひらきえず、夜

は明ながらまだくらやミのごとく、人の往来も

さらになし、やうやう末のこくにおしうつる時分に

本郷の四町め西口に本妙寺とて日蓮宗の寺によ

り俄に火もえ出てくる煙天をかすめ、寺中

一同の焼あがる、折ふし魔風十方にふきまハシ

PS

即時に湯島へ焼出たり、はたごや町よりはるか

にへだてし堀をとびこえ、駿河台、永井しな

のゝ守、戸田うねめのかみ、内藤ひだのかみ、松平しも

ふさの守、津軽殿そのほか数ヶ所、佐竹よしのぶ

をはじめまいらせ、鷹匠町の大名小路数百の

屋形たちまちに灰燼となりたり、それより

町屋かまくらがしへ焼とおりぬ、かく当酉の刻に

いたりて風はにしになりはげしく吹しほりけれ

ば、神田橋へハ火うつらずしてはるかに六七町へだ

て、一石ばしの近所さや町へとびうつり、牧野さ

どのかみ、鳥井主膳正、小浜民部少輔、そのほか町

奉行の同心屋敷、八町ぼりの御舟蔵、御舟奉

行所のやかた数ヶ所、海辺にハ松平越前守、さし

も大きにつくりならべられし殿舎ども風に

したがひ煙につままれて焼あがり、猛火のさか
なる事四王切利の雲のうへまでものぼるら
んとぞおぼゆる、こゝにおひて数万の男女けふりを
のがれんと風下をさしてにげあつまる程に向ふ
へ行つまり、靈岸寺へかけこもる、墓所のめぐりハ
はなハだいろければ、よきところなりとて諸人
爰にあつまりいたる處に当寺の本堂に火か
かり、これより数ヶ所の院々にもえ渡り、一

pg

同に焼あがり、くろけぶり天をこがし、車輪
程なるほのほとびちり、かぜにはなされて
雨のふるごとく大勢むらがりいたるうへに落

ければ、かしらのかみにもえつき、たもとのうち
より焼出、まことにたえがたかりければ、諸人あ
はてふためき、火をのがれんとて我さきにと霊
岸寺の海辺をさしてはしり行、泥のなかにか
けこみける、寒さハさむし食ハくハず、水に
ひたりてたちすくみ、火をばのがれたりけれ
ども精力つきはてゝ大かた凍死する、それま
でもにげのぶることのかなはざるともがらハ炎
五躰にもえつきてことごとくこがれ死す
うめきさけぶこえすさまじく、ものゝあハれ
をとどめけり、すべて水火ふたつのなんに
死にほろぶるもの、九千六百余人なり、此海辺

までちりも残らず焼はらひ、海のむかひ四
五町西のかた、佃島のうち石川大隅守の屋し
きおなじくそのあたりの在家一宇ものこら
ず焼うしなふ

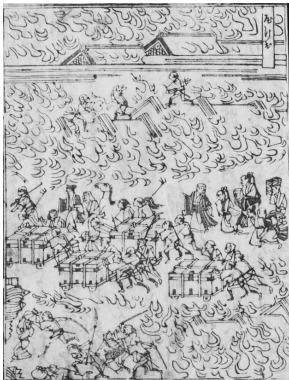
P7

(絵)

(絵)

P8

その日の暮れがたにおよんで、西風いよいよはげし
く吹落て、海上ハ波たかくあがり、其うへに去年
の冬より久しく雨ふらず、かハき切たる事
なれば、なじかハたまるべき風にとびちる炎十町



廿町をへだてたる所へもえ付て焼けあがる程に

神田の明神皆善寺社頭仏閣をいはず堀の丹

波守、太田備中守、村松町、材木町にいたる迄

あまたの家々ことごとく、柳原より和泉殿

橋を切てみな焼通りぬ、扱又右の駿河台の火

しきりに須田町へもえ出て、一筋ハ真直に通りて

町屋をさして焼ゆく、今一筋ハ誓願寺より追ま

ハして押来る間、江戸中町屋の老若、こハそもいか

なる事ぞやとておめきさけび、我も我もと家

財雑具をもち運び西本願寺の門前におろしを

きて休みける處に、辻風夥しく吹まきて

当寺の本堂より始て数ヶ所の寺々同時に

関と焼たち、山のごとく積あげたる道具に火も

え付しかば、集りいたりし諸人あはてふためき命

をたすからんとて井のもとに飛入、溝の中に

懸入ける程に、下なるハ水におぼれ、中なるハ友に

おされ、上なるハ火にやかれ、ここにて死するもの四

百五十余人なり、さて又はじめ通り町の火ハ伝馬

P9

町に焼きたる、数万の貴賤此よしを見て退あし

よしとて車長持を引つれて浅草をさして

ゆくもの幾千万とも数しらず、人のなく声

くるまの軸音、焼くずるゝ音にうちそへて、さな

がら百千のいかづちの鳴おつるもかくやと覚えて

おびただしともいふばかりなし、親ハ子をうしなひ
子ハまた親におくれて押あひもみひせ

きあふ程に、あるひハ人にふみころされ、あるひ
は車にしかれきずをかうふり、半死半生に

なりておめきさけぶもの、又そのかずををしらず

(絵)

P10

かゝる火急の中にも盗人は有けり、引捨てたる車
長持ちを取て方々へ逃げ行く、殊更におかしかり
けるは、位牌屋の某が我一跡は是なりとてつくり
たてたる大位牌小位牌、朱塗、箔綵(はくだみ)色々成
けるを、車長持にうち入引出し、余りに間近く



本願寺

燃えきたる火を逃れんとて、うち捨てたるを

何時の間にかはとりて行、浅草野辺にて錠をね

じきるも蓋を開たりければ、用にもなき位牌

ども成けり、火事を幸に物をとらんとねらいけ

る盗人共、あるいはぬか俵を米かとおもひて取て

のき、或は藁草履の入たる古かわごを小袖かと

心得て奪い取りてにぐるも有、其中に此日頃

重き病を請て、今をかざりとみえし人を火事にお

どろき、すべきかたなくて半長持におし入、かき出し

辻中に卸し置たりしに、何者とは知らず盗取

行方なくなりにけり、是を尋んとする程に、家財一跡

皆焼すてたる人もあり、あるひは我子をば取うしな

ひ他人の子を吾子とおもひ手をひきうしろに
負て遠く逃げたるものもあり、年老たる

親、いとけなき子、足弱き女房を肩に

掛け手を引、せなかにかき負て、なくなき落行
ものもあり

P11

(絵)

爰に籠屋の奉行をバ石出帯刀と申す、しき

りに猛火もえきたり、すでに籠屋に近付しかバ

帯刀すなハち科人どもに申さるゝハ、汝ら今

はやきころされん事うたがひなし、まことに

不憫の事なり、爰にて殺さん事も無惨



なれば、しばらくゆるしはなつべし、足にまかせ
て何方へも逃行、随分命をたすかり火も

しづまりたらば、一人も残らず下谷のれんけい寺

へ来るべし、此義理をたがへずまいりたらば、我が身に
替ても汝らが命を申たすくべし、若し又此約

束を違えてまいらざる者ハ雲の原までもさがし

P12

出し、其身の事は申に及ばず一門迄も成敗すべし

と有て、すなはち籠の戸をひらき、数百の科人を

ゆるし出してはなされけり、科人共は手を合わせ涙

をながし、かかる御めぐみこそ有がたけれとて、おもひ

おもひに逃行けるが、火しづまりて後約束のごとく

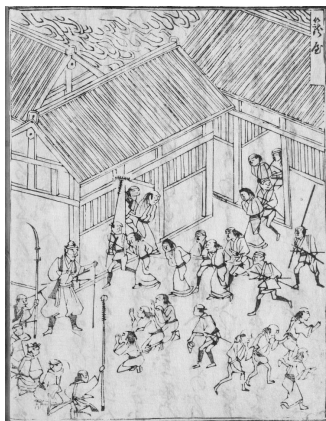
皆下谷にあつまりけり、帯刀大きによるこび、汝等
まことに義あり、たとひ重罪なればとて義をま
もるものをばいかでころすべきやとて、此の趣
を御家老がたへ申上て、科人を許し給ひけり
道ある御世のしるし、直なるまつりごと、上に正し
ければあまたの科人ども義を守りて命をたす
けられけるこそ、ありがたけれ、此事をきく人みな
いわく、帯刀に情け有、科人また義あり、御老中
に仁ありて命を助け給へり、爰におひて国道
あることは明らけしとぞかんじける、其中に一人
の囚人しかもいたりて科の重かりしが、よき事に
おもひて遠く逃のび、我古郷にかへりしを、在所の

人々、此ものはたすかるまじき科人なるに、のがれて
帰りしこそあやしけれとて、連れて江戸へまいりければ、
奉行がた大にくまれ給ひてころされしとなり

P13

(絵)

しかるにかのあさ草の惣門をころざしてにげ出けるともがら、貴賤上下いく千万とも数しらず、
されどもむかふは河原なり、枡がたをだに出たらバさのミせきあふまじかりしを、
いかなる天魔のわざにや籠屋の科人どもろうを破りてにぐるぞや、
そののがすなとらへ



よといふ程こそ有けれ、あさ草のますがたの惣門をはたとうちたりけり、これはおもひよらず諸人いづれもわきまへなく、跡よりくるまをひきかけひきかけ押来る程に、伝馬町よりあさ草の惣門つみぢのきハマまでそのみち八町四方があ

P14

ひだ、人と車ながもちとひしとつかえて、いさゝかきりを立つべきところもあき地ハさらになし、門はたてゝあり、跡よりハ数万の人おしに押されてせきあひたり、門のきハなるものどもいかにもして門の関貫を引はづさんとすれども、家財道具をいやがうへに積みかさね

たれば、これにつかへてとびらさらに開かれず、さてこそ前へ進まんとすれば門はひらけず、うしろへかへらんとすれば跡より大勢せきかくる、進退ここにきハマリ、手をにぎり身をもみて只あきれはてたるところに、北のかたはじめ焼とまりし柳はらの火おこりてぜいぐわんじ前の大名小路へおしうつりて立花左近、松浦肥前、細川帯刀、丹羽式部少輔、安藤但馬、加藤出羽守、おなじく遠江山名禅閣、一色宮内少輔、都合三十五ヶ所、寺がたにハにちりんじ、かんぜんじをはじめとしてちそく院、こんがう院にいたるまで百二十ヶ寺

一同にもえたつ、右伝馬町の火とひとつになりて焼あがり、ほのほハ空にみちみちて風にまかせて飛び散りつつ、さながら集まりおしあひもミあふ人のうえに三方よりふきかけ

P15

しかば、数万の男女さハぎたち、あまりにたえかねて、あるひハ人のかたをふまへてはしるもあり、あるひは屋の上にあがりてにぐるもあり、これハこれハといふ程こそありけれ、高さ十丈ばかりにきりたてたる石垣のうへより堀の中へ飛び入り、命のたすかるかとかやうにせしともがら、いまだしたまで

おちつかず石にてかうべをうちくだけ、かいな
をつきおり、半死半生になるもあり、したへ
おちつくものハ腰をうちそんじてたちあが
ることを得ざるところへ、いやがうえにとびかさ
なり、おちかさなりふみころされ、おしころ

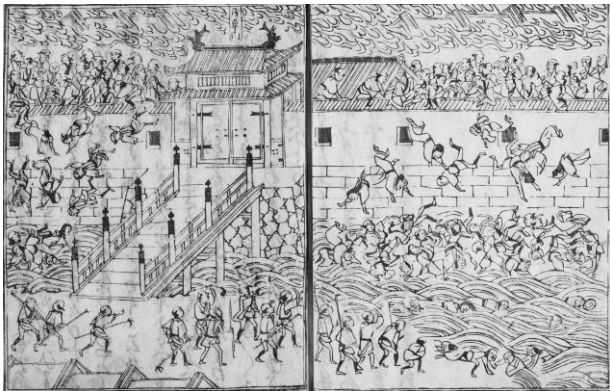
され、さしもに深き浅草の堀死人にてうづ
みけり、その数二万三千余人、三町四方
にかさなりて、堀はさながら平地になる

P16

(絵)

(絵)

P17



のちのちにとぶ者ハ前の死骸をふまへて飛

ゆへに、その身すこしもいたまずして河向ひに

うちあがり助かるものおほかりけり、とかく

する間に重々にかまへたる見付の矢倉

に猛火燃えかかり大地にひびきてどうと崩れ

死人の上に落ちたる、さて人にせかれ、車にさへぎられ

ていまだ跡に逃おくれたるものどもハむかふへす

すまんとすれバ前にハ火すでにまハリ、後によりハ

火のこ雨のごとくにふりかゝる、諸人声々に

念仏申事きくにあハれをもほよす間

に前後の猛火にとりまかれ、一同にあつとさけぶ

声、上ハ悲愴のいただきにひびき、下ハ金輪の底迄

も聞ゆらんと、身の毛もよだつばかりなり、翌日
みれば馬喰町、横山町の東西南北にかさなり臥
たる死人のありさま、眼もあてられぬありさま
なり、さてその夜の亥の刻ばかりにうつりては
悪風なおもしろづまらで、海手をさして下屋敷
以上十九ヶ所ひとつも残らず炎上せり、此時
にあたつて御倉のうしろ、逃げおくれたる
もの七百三十余人有けるが、御倉に火かゝりて詰
置かれし米俵にもえつきたりければ、諸人こ
の煙にむせび、うちたおれ、ふしまろび

P18

あるひハ川中に転び入て死す、それより

炎は七八町もへだてし大河を飛こえ、うし島 *現回向院付近

新田にいたり、しまの在家迄ことごとく焼

ほろびて、其夜の寅の刻に火事ハこれ

までにてしづまりぬ

(絵)

P19

夜すでにあけくれば四かく八方へおち散たり
ける者共、親は子を尋ね、夫は妻をうしなふ
て涕とともに声うちあげ、そんでうそのなにかし
と名を呼びつつ声々によばはりて、やうやう
尋ね逢てたがひによるこぶ人もあり、又は
死にうせて巡りあふ事なく、力をおとして



歎くもありて、ものゝわけも聞えず、ここかしこ

にあつまりて焼死て重なり伏したる死骸

どもをかたずけかたずけ、親子兄弟夫婦の屍を

尋ねもとむるに、あるいひハかしらの髪みな燃え

つくして半は過て大方尼法師のごとく、くろ

くすぼりに焼こがれ、あるひハ小袖着る物みなもえ

うせて五躰焼めぐり、豎横に肉さけて魚の

あぶりもののごとくなるもあり、みしにもあら

ぬおも（面）わすれして、それかこれかと見ちがへてたず

ねまどへるもおほかりけり、その紛れには盗

人共たちまじりて死人の腰につけ、肌へに

つけたる金銀をはづしとり、その焼金をもち

出て売代なす、これをまた買とらんとてあ
つまりける程に市のごとく、その外町の中
辻小路におとしすてたる家財雑具共数も
しらず、拾ひとり持ち出して売りしろなし

P20

にわかには徳付たるものもおほかりけり、らくさい
ぼう又かたりけるやう、それがしの母も行き方
なくなりしかば、今は定めてむなしくなりぬ
らんとおもひさだめ、夜のあけがたに死人のか
さなり臥たるあたり、彼方此方と尋ねも
とめしに、母に似たる人焼死てうち臥たるを、こ
れこそそれよいざや家にとりてかへり葬礼

仏事せんとて戸板にのせて家にかへりければ

孫子兄弟跡まくらにさしつどひてなげき

かなしむところに、門よりしてまことの母かへ

りきたれり、人々此よしを見て、あれはいかに

はや亡霊になりて来り給ふぞや、此日比

申給ふ念仏は何のためぞや、妄念をもさま

して、すみやかに極樂の上品上生に往生

せんとこそおもひたまふへきを、まだ此娑婆に

執心を残して亡霊になりて来り

給ふかや、あさましき御事也、とくとくかえり給へ

跡をばねんごろにたふらひてまいらすべし

かまへて六だうの辻にばしまよひ給ふなど

いひければ、母大きにおどろき、われハ芝口まで
逃のびて命たすかり侍り、死なずしてかへり
しをばよろこばで、これはいかなる事をいふぞや

P21

と申さるゝ、人々聞て御死骸はまさしくこれに
有、死なずと宣ふこそ心得侍らねとて、彼取
てかへりし屍を能々みれば、さしもなきものゝか
ばねなり、人たがへは世の常あることなれども
にがにがしき中におかしかる事也、まず何
事もなく帰りおはせしこそうれしけれとて
とるものも取あへず、かの屍をばひそかにかき
すてたる由々しさよ、さらば一家は何事なく

たすかりける祝ひ事せよやとて、酒肴かひ
もとめてかなたこなた数献に及びてよろ
こぶ事かぎりもなし

(絵)

P22

(表紙) むさしあぶみ下

P23

むさしあぶみ 下

明れば十九日江戸中によるこびをなす者

歎きをいたすもの相まじはりて、いとさうぞうし

かりけり、焼け残りし貴賤其一族どもの類火

にあひしを日ごろのよしみ此時なり、いかでか見す



つべきとぞ、焼跡にはせ集りとやかくやと懸
まはる、あるひは粥を煮てもち来り、あるひハ酒
肴をおくりつかハしなどする處に巳のこく
ばかりに、小石川伝通院おもて門の下新鷹匠
町、大番衆与力の宿所より焼亡出来れり、此
煙りのありさまを遠き所より見るものは、しばし

P24

が間ハ旋風にまきあぐる土煙なりといふ者も有
又きのふの焼野のきえ残りたる煙なりと云
ものもありて、火事とはしかと見さだめず、しか
も北かぜ宵よりも猶はげしくふきしかば
時刻をうつさず吉祥寺の学寮院々坊々もえ

うつり車輪ほどなる炎くろけふりの中に飛

ちりて、十町二十町が外にもえわたる事、同時に

廿余ヶ所なり、しばしが内に水戸中納言殿さし

もつくりならべ給ひし大きな御やかたに火か

かり、焰と煙とまきたてもえあがり、大堀をへだ

て、本鷹匠町の森の下、飯田町、典寿院の御

所、左右典厩公の南御殿、中の丸横御殿守、二の丸

三の丸を初めとして、松平加賀守おなじく伊豆守

土炊遠江守、水野出羽守、本多内記、酒井津の守、藤

堂大学頭、小笠原右近大夫、安藤対馬守、土屋民部

少輔、井上河内守、酒井雅樂正、松平和泉守、おな

じく五郎、おなじく越前守、これらの御やかた金

銀珠玉をちりばめてみがき立たる大夏高樓、棟
との大名十五ヶ所、其外南町奉行の御台所、中
川半左、伊奈半左衛門、天野五郎大夫、御細工小屋
ともに五ヶ所、ときは橋のうち合せて廿か所、それ
よりうちつづきて、鍛冶橋の内むねとの大身に

P25

は細川越中守、松平新太郎、おなじく相模守

御執事酒井讃岐守、山内土佐守、有馬中務、京

極丹後守、戸田左門、蜂須賀阿波守、森内記、京極主

膳正、小笠原主膳正、吉良若狭守、保科弾

正、松平丹後守、溝口出雲守、新庄越前守、松平但

馬守、織田因幡守、松平遠江守、同出雲守、小出

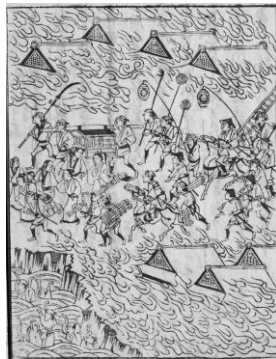
伊勢守、織田丹後守、杉原帶刀、松平能登守、伊丹
藏人、久世三四郎、酒部三十郎、おなじく長門守、毛利
壺三郎、水野下総守、山名主殿、米津内藏介、前田
右近、出野甚内、中根吉兵衛、近藤石見守、同縫殿介、日
根野織部、神尾宮内、伝奏屋形、医師道三に至る迄
大名の屋形廿六ヶ所、小名の屋形十七ヶ所、伊達遠江守、
奥平大膳正、真田河内守、大久保加賀守、井伊兵部、松平
山城、青山大膳、九鬼大和守、堀美作、各々数奇屋橋の内
九ヶ所、南北都合七十二ヶ所、年内日比作り并たる屋形之
善尽美尽みがき立たる大廈高樓の構、数万間前後十五町
一同にもえあがり、黒煙天をこがし、炎は空を焼、棟木瓦
のくずれ落る音おびただしともいふハかなし、乾坤

これがためにかたふき、山河此故にくつがへかと、諸
人肝をけし、魂を失ふ、世界さながら猛火となる、ただ
これ天の三災一時におこりて国土ことごとく劫火の
ために焼うするかとぞおぼえし

P26

(絵)

申の刻より北風西になをりて、いよいよあらく吹
しかば、これにて焰を吹きかけて、紅葉山西の丸ハ堅
固に残りけるこそあやうけれ、御馬場の近辺土手
をさかひてやようすかしへとびうつり、北みなみ廿余
町一面になり町屋をさして焼出る、これによつ
て中橋京橋の町人ども、きのふの火事のまださ



めざるにうちそへて、又けふの大火事これはそも
何事ぞや、只今世界は滅却するぞやといふ程こ
そ有けれ、大きにあはてさはぎて、昨日の焼跡へのか
むとて中橋を北へとこころぎすものもあり、又
風下を心かけ京橋を南へとはしる人もありて

P27

男家も町も上を下にもてかへし、鍛冶町と
長崎町のものども、前後ひとつになりて逃出つゝ
いやがうえにせきあひたり、去年霜月の比より今
日に至る迄、既に八十日ばかり雨一滴もふらで乾
切たる家の上に火のこ落かゝり、はげしき風に
吹たてられて、車輪のごとくなる猛火地にほと

ばしり、町中に引出し火急をのがれてうちすて
たる車長持は辻小路に積み上げせきあひ、人更に
心のまゝに通り返らず、諸人もみあひ、こみあひ
ひしめく間に、猛火先々へもえ渡りしかば、目の
前に京橋より中橋にいたる迄四方の橋一度に
どうと焼落る、爰におひて火の中にとりまかれた
る諸人、一連に南に行、北に帰り、東西を
あがきめぐり声をそろへておめきさけぶ、すで
に間近くせまりて燃来りけるとき、あまり
にたへかね、われ人をたがひに楯になして火をよ
けんとする中に、まくれかゝる煙にむせびて臥
まるぶものもあり、あるひハ五躰に火もえ付て

たおれまどふ、せきあひおしあひける中に煙に
むせび、火にやかれてうちたおるれば、其後なる
者共将棋倒しのごとく一同にたおれこ
ろぶ、其うへへ焰おちかかり煙うづまきせきさ

P28

けぶ声、これや此地獄の罪人共の焦熱

大焦熱の焰にこがされ、獄卒のかしゃく

をうけ、叫喚大叫喚の声をあげてか

なしみさけぶらんも、かくやと覚えて哀れ也

爰にて焼死するものおよそ二万六千余人、南

北三町東西二町半にかさなり臥累々たる死骸

更に空き地はなかりけり、家財雑具太刀かた

な、金銀米銭いくらといふ数しらず、辻小路
にうちすて、踏付、焼うする、あはれといふもお
ろかなり

(絵)

P29

そこより南は新橋木挽町、東は材木町、水
谷町へ焼わたり、二町余りの河むかひ、紀州大納言
尾張大納言の両御蔵屋敷より奥平みまさ
かの守に至る迄大名の蔵屋敷十六ヶ所こと
ごとく塵灰となる、果には鉄砲洲へ吹つけて其
日の酉の刻ばかりに海辺にて焼とまる、浅草川
深川よりこれまで惣じて六里あまりの湊々に



て舟どもの焼ける事幾万艘とも数しらず、かくてやうやう焼しずまるとおもひしに、申の刻ばかりに江城の西翹町五町目の在家より別に火もえ出て、松平出羽守おなじく越後守同く但馬守其外數十ヶ所さしも綺麗嚴浄なる

山王権現勧請の地、天神の社にいたるまで、たちまちに咸陽一朝のけふりとなり、いよいよ西かぜはげしくして、東照権現の御屋しろ、紅葉山へ猛火しきりに吹付しかばあやうかりける處に権現庇護の御力をや添られけん、俄に北風となりて吹切ければ、西の丸つつがなく残りけるこそめでたけれ、それより南のかた大名小路へ

焼とおる、井伊掃部頭、上杉弾正少輔、毛利長門守

伊達陸奥守、島津薩摩守、黒田右衛門佐、鍋島し

なのかみ、南部山城守、真田伊豆守、丹羽左京、相

P30

馬大膳、京極刑部少輔、松平伊賀守、同周防守、戸

沢右京、水野美作守、水谷伊勢守、金森長門守

板倉周防守、土方河内守、相良左兵衛、浅野安芸守

同内匠、同因幡守、仙谷越前守、亀井能登守、伊東大

和守、松平左京大夫、同大和守、柳生主膳正、秋田淡

路守、小出大和守、太田原備前守、大関土佐守、鍋島紀伊

守、究竟の屋形廿六ヶ所、小名には兼松又四郎、高木

肥前を始として都合廿余ヶ所、その外御成橋の御

門の中は一ヶ所も残らず忽ちに片時の煙と

なりにけり、又西の丸の下に至りて阿部豊後守

堀田上野守、水野監物、松平外記、北条出羽守、稻

葉美濃守、大久保右京、酒井備後守、松平縫殿、同

若狭、其外一文字に桜田の町屋に焼うつりて

すぐに愛宕の下大名小路へうちつづく、まず大名

には有馬藏人、大村丹後守、秋月長門守、稻場能登

守、脇坂淡路守、中川内膳、島津但馬守、一柳監物、木

下伊勢守、山崎甲斐守、植村出羽守、桑山修理、青木

甲斐守、分部左京、北条美濃守、松平隱岐守、大島

茂兵衛、小出大隅守、織田源十郎、堀三右衛門、佐久間不干

内藤左京、能勢小十郎、伊達政宗の中屋敷、毛利長

門守の下屋敷、同吉川美濃守の宿所をはじめと
して大名小名の屋かた八十五ヶ所に焼くずれた

P31

るとて、桜田の火すでに通り町に燃え出て、海辺に
て保科肥後守の下屋敷、伊達陸奥守の倉やしき
脇坂淡路守の下やしき、又そのほかに芝の浜手に
は松平相模守、亀井能登守下屋敷かたにい

たるまで以上都合十八ヶ所、増上寺の中にては

東照近縁の社頭、台徳院、おなじく御台の御廟

おなじく本堂、経蔵、鐘楼、五重の塔婆、三門北
のうら門などはつつがなく相残れり、されども所
化寮百十ヶ寺、おもての東門、神明の本社、神樂堂

護摩堂、あやしのかずならぬ禿倉にいたるまで
その夜の丑の刻ばかりにみなことごとく炎

上せり、此の時分には風おだやかにゆるく吹け
れば、うちけすならばたやすかるべきに、諸人
ただおどろきあはてゝ方々ににげちりて命を
大事とかまへたれば、人さらになし、風はふかね
ども火はこころのままに焼行ほどに、増上寺よ
り南へ十一町、芝口三町目海手に至りて火は
おのづから消にけり

P32

(絵)

本郷よりこれまでその道すでに六十余町



四方十余里、まさに広き野原となりて、眺々と
してほとりなし、惣じて町中五百余町、大名小路
五百余町、大名の屋形五百余宇、小名の
宿所六百余ヶ所、その外汎々の輩はあげて
かぞふべからず、御城の殿守、大手の御矢倉を
はじめて外郭、浅草の目付、神田の枳形に
至る迄、矢ぐらの数三十余ヶ、又日本橋をはじ
めとして江戸中にありとあらゆる橋々六十ヶ
所、此うち浅草橋と一石橋一つ、すなはち其橋も
と後藤源左衛門といふものゝ家ばかり江戸中の名
P33
残に只ひとつ焼残る、土蔵の数九千余庫、そ

の中に焼けのこりたるは十分が一もこれなし、代々の重宝、家々の記録も此時にあたつて失せぬらん

次に堂社には神田明神、山王権現、天神の社、神明

の本宮、誓願寺、知足院、日輪寺、西東両本願寺、本誓寺、典学院、吉祥寺、金剛院、弥勒院、大龍寺、船光寺、薬師寺、珠見寺、願教寺、唯然寺、地藏院、靈岸寺、報恩寺、調善寺、長久寺、信経寺、常蓮寺、増上寺の所化寮、開善寺、海庵寺、常德寺、善徳寺、円応院、其ほかの寺院三百五十余宇みなごとごとく焼ほろびたり、昨日十八日の昼より焼おこり、十九日のあけぼの、廿日の辰の刻まで昼夜四日の大火事におびたしき旋風ふきて、猛火さかりになり、十町廿町をへ

だてゝ飛こえ飛こえ燃え上り燃え上りたるほどに
前後さらにわきまへなく、諸人逃げまどいて焔
にこがされ、煙にむせび、又大名小名の家々に
日ごろとしごろ秘蔵して立飼れける馬ども

幾らと云数しらず、家々に火かかればすべき

かたなく綱を切りて追放し追放しせられしかば
此馬共人と火とにおどろき、逸散にかけ出し
数多むらがりたる人の中にかけこみ行つ

まりて、人と馬とおしあひもみあひければ、これ

P34

にふみころされ、うちたおされ、火にやかれ煙に
むせび、あそこ爰の堀溝に百人式百人ばかりづつ

死にたおれて、なしと云う所もなし、火しずま
りてのち、つぶさにしるし付たれば、およそ十万
二千百余人とぞかきたりける、一類眷属の有
ものは尋ねもとめて寺におくるもあり、大か
たはいかなる人いづくのものともたしかならず
かはりはてたるありさま、それとさだかにしる
事なし、やがて此死骸をば河原のものに仰付
られ、むさしと下総との境なる牛島と
いふところに船にて運びつかわし、六十間四方に
掘りうづみ、新しく塚をつき、増上寺より
寺をたて、すなはち諸宗山無縁寺回向院と号
し、五七日より前に諸寺の僧衆あつまり、千部の

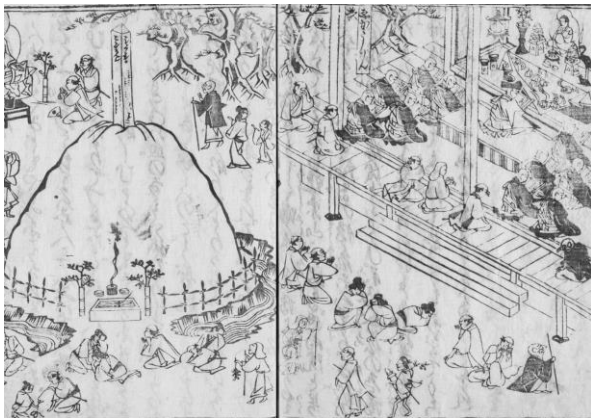
經を讀誦して跡をとふらひ、不斷念仏の道場
となされけるこそ有がたけれ、江戸中の老若男
女袖をつらねて参詣し、声うちあげてもろ
ともに念仏申て回向するこそ尊けれ

P35

(絵)

P36

あるひは老たる祖母おうぢは生残りて、若く盛ん
なる孫子をうしなひ、あるひは女房只
一人残りて子供や夫にはなれたるもあり、す
べて一家のうちには五人三人又は十人あまり
も空しくなりて、つれなく只一人二人生残り



て歎き悲しむといへども、さすがに身をも

棄てられねば、血の涙をながして泣より

ほかのこともなし、家々は残らず焼て江戸中

広き野原となりて、とり囲うべき竹のはしら

すがごもだになければ、焼つちの上になうづく

まい、昼はせめてもの音にも紛れよかし、夜に

入れば何となくものすさまじく思ひめぐら

せば悲しきとも辛きとも言葉には述べ難し

親におくれ、夫にはなれ、子を失い、妻をこそ

して悲しさのあまりに五輪卒塔婆をかひ

もとめて回向院につかはし、無縁塚の上に立る

ある人一家に十人あまり失いて、其ため

*菅菰

に卒塔婆十本もとめけるが、此うちへ今一本を
添て給れといふ、売手聞いていふやうは、五輪そ
とばなど申ものは余慶多くはせぬ事なり

何のために一本を添えとは宣ふと云えば、此人こ
たえて申たるは、親類のうちにやけどをしてい

P37

たむ者あり、もし死たらばそれにも立てと

らせんためなりと答へけり、いにしへ五輪を

添よと申せしはなしの有て、世の笑種とな

れり時とつてはかやうのことも有けるものかな

あまたの死に屍ををひとつ穴にうずまれし

事なれば、我親類はそこもとに埋れたりとは知

ねども、せめて悲しさのあまりには思ひ思ひに

五輪卒塔婆を塚の上に立ならべて、聖靈頓 *極楽往生を祈る

証仏果のためと回向して花をさし、水をくみ

て跡をとふらひ泣く泣く念仏申すありさま

見聞だにつけてあはれなり

(絵)

P38

去年の十一月より当年正月に及ぶまで日で

りして晴天しゃかに黄泉も乾きリテ今月の

廿日まで雨は一滴もふらざりに、廿一日に大雪

俄にふりつみて、あらし激しく寒き事

いふばかりなし、かかる程に江戸中には米と云



もの一粒もなく、三日が間大飢饉して、その
上竹木なければ俄屋をもはらず、大方みな
雪霜にひらうてにうたれて寒さはさむし
肌凍て老少男女おほく死けり、一業所感の因
果は人ども死すべきときの定まりけん、火をの
がれては水に溺れ、飢て死に、凍て死す、いづ
れ命は助からず、無慙と云もおろかなり
然る處に御城の西の方、山にて筋僅かに
残りし大名小名よりして思い思いにあるひは
日本橋或は京橋方々におひて、仮屋をたて
奉行を添えられ粥を煮て餓えたるものに
施行せらる、又御城中よりは内藤帯刀、松浦

肥前、岩木伊予、これらの人々を御奉行として御成橋、新橋、日本橋、筋かい橋、増上寺前に飯屋をたて、かゆを煮させて飢人窮民に施行し給ふに、江戸中の老若男女あつまりて給はる、もとより受けて喰べき入れ物もな

P39

ければ、焼われざる茶碗のかけ、瓦のわれにて受て食す、それにも及ばず、あまりに寒く飢たる悲しさに直に手にてうくるもあり、其諸人の有様、或は頭の髪型、かお半焼てうけたるも有或は小袖の前後裾まで燃たるをもみけしてやうやう肩にかけ、手足の焼損じたるも有、妻子孫

子に別れてなくなく集る人も有、そのかみはさしも富貴栄

花なる人一跡皆失ひつつ手と身となり、命計りを

たすかりて、寒さのまゝに恥を忘れたる若き女房

なんども多く集りて小鉢の破に粥をうけて、泪と

ともに食うもあり、あわれなりける有様也

(絵)

P40

さて二月の中比には城外の在々には夫々に

小屋を立て商売を営む、江戸中の焼出さ

れは諸縁にしたがひて入こみしかば、貴賤の出入

繁く、さしも賑わいて見ゆ、三月の比にはとかく

才覚をめぐらし町屋どもかたの如くの柴の庵を



結び雨風を防ぎしはそのかみに引替ていと

ど物あわれなり、まことに治世安民の政道ただしき
御事なれば、かじけなく公方より銀子壱

万貫目を町人にくだし給はり、これにて家造り
し、元の如く商売すべしと仰下さる、御町奉

行所神尾備前、石谷将監兩人承り江戸中四百町城
外の辺町百余町の町人をめしよせて相渡さる

そのとしの九月には土木の功なりて、町並一様に
六万間棟をならべ、軒を揃て綺麗にたて侍り

もとの大地は広き六間なれば往来狭しとて

今は広き十間なり、これによつて車馬道にとど

まらず、人のゆきかひやすらかなり、又白金

町より柳原まで町屋一通りのけられ、高さ

二丈四尺に石をもつて東西十町あまりに土手を

つかせらる、日本橋の南、万町より四日市までの

町屋をとりのけ、高さ四間に川ばたにそふて北を

うけ、東西二町半に畳上らる、又日本橋より京橋

P41

まで八町の間、町家三ヶ所を取りのけて、会所

三十間づつに広くなれり、是は町屋あまりにせきあ

ひ、諸人いやが上に入こみ、やゝもすれば失火を出し、人物を

そこなふ事の度々に及ぶ故、土手をつきたらば江戸中の者

いかなる事有とも退足たやすきためにとの御事也、扱右

の取退けられし五ヶ所の町人共に引料として家賃

家に付金子七十両宛替地にそへて下されけり、又其年の暮には、焼給ひし屋形屋形の大名小名へ残ず黄金を恩賜有けり、上は公侯より下は民間に至る迄、あまね

き君の御めぐみに程なくもとの如く江戸中治り繁

昌して高家貴人は礼義厚く、あやしの庶民も財産の利に飽てめでたくさかふる事日々に百倍せり

(絵)

P42

楽齋房申すやう、いかに狛物売殿聞給へ、それがし殊の外なる大面目を失ひたと申は、此折から
の事なり、とてもものに語りてきかせ侍らん
それがし十八日の火事には、親類家中無事なりし



かば、めでたき事なりとて、酒肴買もとめ十九日の朝
に祝言して数献のみける酒に酔ふし、前後さらに
しらざりしに、又火事よといふに妻子ども我
をいかにどかすべきとて、車長持におし入、錠をおろし
て引出し、芝口にうちすてたり、ぬす人どもあつまり
鎖をねじぎり長持をうちわる音の寝耳に入
て目をさまし、あたりをさぐりまわせば、四方は板也
側には刀一腰小袖なども手にさはれり、それ
がし思うやう、我は死に侍り棺に入て野辺におく
りたり、獄卒共が呵責せんとてかやうに棺を
うち破るなり、此刀にて一まづ防ぎて見ばや
と思ひ、引抜きて踊出たれば盗人共は肝を

消して逃ちりけり、扱立あがりて見れば、辺りはく
らやみにて、はるかの東はばうばうと燃えて、人のお
めき叫ぶ声の聞えしを、心に思うやう、あ

そこは定めて無間地獄なるべし、罪人共の猛
火にこがされ、獄卒に呵責せらるゝ音やらん

あらおそろし、いかにもして極楽の道に行かむやお

P43

もひて行ければ、馬どもおほくはなれてかけ来る、さ

ては爰元は畜生道のあたりなるべしと思て

猶たどりゆくに、焼出されの女、わらは、老たるもの共人の
肩にかゝり引立られて来るを見ては、是は只今む
なしくなりける罪人をしゃば世界より獄卒

どもの連れて来るにてぞあるらんと心に心を

迷わされ、暗き方に行けるが、芝口に出つゝ十王

堂の躰を見れば、燈明かすかにかゝげ、えんま大王、俱

生神ならび給へり、それがしは娑婆に有し時に人

悪かれとも存せず、人の物は盗みたることもなし

折々念仏は申侍り、定めて罪科も軽く侍らんに極

楽に送りて給はれといふに、もとより木像の焰

魔大王なれば、とかくの返事なし、いかなる目にか

あふべきと恐ろしさにそこを走り出て、かたな

こなたとする處に、鐘の音念仏の声の聞こえけり

是ぞ西方極楽の上品上生なるべしと思ひ近

く立よりて門をたたけば、内より何者ぞといふ

婆婆の往生人にて侍り、爰を明けさせ給へ、観音
正姿殿、早く百宝しやうごんの蓮のうてな
の上に上らんと云に、内より大きに笑いと
よめき、火事にうろたえて気の違いたるものゝ
来たれるぞやと云う、力なく其所を行過る程

P42

に、夜はほのぼのと明にけり、かゝる處、大名方
の焼やしきにて粥を煮させて施行し給ふを
見れば、諸人あつまり手を差出してこれを受け
て喰らう姿、いづれも物がなしくあさましか
りければ、爰は定めて餓鬼道なるべしと思ひ、又か
たわらを見ればものをとりにぐる盗人を追懸

て只一うちに切り倒すを見ては、修羅道かと

思い、念仏申と休みいたれば、しれる友達来り

是はいかにと云う、これにて夢醒めつゝ恥ずかしき

事かぎりなし、一門、妻子、家も宝もみな滅びし

しかば、これを菩提の縁となし、すぐにかみをそ

り、衣をすみに染めて、これまでさまよひのぼ

りしなり、我生ながら六道を巡りたりとお

ぼえ侍り、今は中々世をわたる物うさにくらぶれ

ば、生仏になりたり、心にまかせて行たき方に

行つゝ、今少しの命をたのしみ侍り、仏種徒縁

起と仏の説き給へり、火事にあふて一跡皆たお

れしは物憂き事ながら、菩提の縁となるからに

はよき善知識にて侍らずやといふ、こま物
売重ねて云やう、まことにかゝる一大事
こそためしもまれなるおもいがけぬ事には
必ず心うろたへてかやうのおこがましき

P45

事もあるものなり、さのみに恥とおぼすべからず
さていにしへもかやうに人の大勢一同に死した
るためしもありけるかといふ、樂齋こたえ
て曰く、昔の事をつたへきくに、もろこし
には宋の仁宗皇帝の御宇、京祐四年十二月
におびただしき大地震ありて、民の家々
を揺り倒す、これにおされて死するもの

二万二千三百人、疵を蒙りて半死半生に
なり、或は一生の片輪になりけるもの国
中に五千六百人としるせり、その後又大元
の世宗皇帝の御宇、祥興廿七年八月に又
大地しきりに動いて山崩れては谷をうず
み、大木倒れては川をせき、地は裂けわ
かれて、下より泥を押し上げ、くろけぶり
天に舞い上がりて、国中に人の死する事七
千余人としるせり、同じく宋の成宗皇帝
の御世大徳十年八月に大地震ありて五千余
人死せり、同じく武宗皇帝の御世至令三
年六月に洪水みなぎり来りて、官舎民家を

押し流す事二万一千八百廿九軒なり、これに溺れて死するもの数を知らずとしるせり、そのほか飢饉洪水兵火にて人民死にほろび

PA6

たる事度々多しと見えたれども、いまだ

此たびの火難の人数には及ばず、又日本にては

人皇第十代崇神天皇の御宇、即位五年に

あたつて、人の死する事天下半に過ぎたり

と言えども、これは疫病のはやりしによりてなり

中ころ平家世をとりてほしいままに奢り

けるが、南都の大衆平家をふくみて調伏

すると聞て、治承四年十二月廿八日、本三位の

中将重衡三万余騎にて南都に押寄せ、般若
坂の在家より火をかけて攻めければ、七大
寺の大衆煙に咽びて防ぎ兼ねて落

ゆく、乾の風激しく吹て、黒煙既に大仏
殿に燃えつきたり、此大仏殿の上には橋を
構えて、兎わらは尼法師いくらといふ事も
なくあがりて隠れいたるところに猛火す
でに堂に燃えつきしかば、我おとらじと降りく
だる程に梯をふみ折りて下になるものはおし
ころされ、上なるものは高き天井より落かさ
なりけり、天井の奥に有けるものどもは何を
とらへて何をふまへてか下り降り侍べらん、あ

やの小屋ならばこそ下より抱きおろし

足をとらへても引おろすべき、さしも日本第

P47

一の大伽藍なれば、十丈にあまりし梁の上なり

今更助かるべき手立てなし、あまりのか

なしさに飛び落つるものは微塵に砕け

て死にけり、火の燃え近付くに従つてお

めき叫ぶ声大地にひびき、やうやく煙に

むせびて臥まろび、かしらの髪、身の

衣に火もえつき、その間に仏殿の火ど

つともえたちて焼崩れ、仏と共に灰と

なりたりといへり、その後北条平の貞時

天下の権をとりし永仁元年四月に俄に大地

震して、家々をゆる倒す。或は長押

に押され壁に押され襲の石で頭をうち

くだかれ、すべて鎌倉中に死する者

一万余人、その外手足を打ち損じ、耳

鼻をうち欠きて半死半生になり永き

片輪となるもの数を知らずとしるせり

近きころ正保二年には尾州濃州に洪水

ありて、両国一面に海のごとく、提崩れ家流

れて、人多く死したりと聞しかど、此たび

の炎上に数万人の焼死たる事前代未聞

の事也、いつの頃にやありけん、さざれ石の

岩ほとなりて、二葉の松の生そひてなどと

P48

いへる小歌のはやりてうたひける折には、上も

下も目出度くおもしろかりけるものを、何

ものゝつたへてはじめたりけん、此ごろ北國

の下部の米つき歌とかや、柴垣といふ事

世にはやりて、歴々の会合酒宴の座にても

第一の見ものとなり、いやしげにむくつけき

あら男の罷出、黒く汚き肌をぬぎ、

えもいはぬつらつきして、目を見出し口を

ゆがめ、肩をうち胸をたゝき、ひたすら身を

もむ事狂人のごとし、右に左にねじか

へり、あふのきうつぶきあがきけるを、座中声を
たすけ、手を打ちてもろともに興せられし
を、見る人さへ疎ましく片腹いたかりしが
はたして諸家ともに皆柴垣となり、大方
は最早此町には生まれ申さぬもあり、火に
焼かれて遁るゝかたなく、柴垣うちうち果ける
にぞ、謳歌の事も思い合わせらるゝと、まゆ
をひそめ、鼻柱を縮めてつぶやく人も
有けり、かやうの事も時節到来の理り
なれば、今更おどろくべき事ならねども、時
に行あたつて諸人めいわくせしぞかし、されど
も前に語る如、君の御めぐみのいともかし

こくおはしますゆえに、江戸中二たび榮
にぎわいて、国もゆたかになびく世の猶

治まれるためしとて、松に小松のおひ

そひて枝もさかゆる若緑、仰ぐに

あかぬ御世ぞ久しき、といふ歌に立かへり侍り

今は是迄なり、いとま申とて鳥居の

方を南に向いて行たり

万治四年丑三月吉日

寺町二条下ル町

中村五兵衛開板

訳者略歴

千九百四十二年生まれ、宮崎県小林市出身
エレクトロニクス、コンピュータ分野で四十年勤務、
退職後古文書解読を学ぶ。ホームページ「大船庵」に
五十件余の近世古文書の解説と現代文訳註及び翻刻を
掲載。一部は国会図書館デジタル版に登録、落穂集、
岩淵夜話、薩州旧伝記、小林誌等



明暦大火時焼残った西の丸は二百
十年後皇居として引継がれた。

むさしあぶみ 上下

初版発行 2022年6月

原本 万治四(1661)年 中村五兵衛板本

訳注 高橋 駿雄

出版 大船庵

ホームページ 検索：大船庵 又は

URL <http://www.hh.em-net.ne.jp/~harry/>

Eメール: ofuna@hotmail.co.jp